

論文

## 日本の大学におけるスポーツサークルの誕生と拡大 —高度成長期の早稲田大学を中心にして—

中村哲也

高知大学

キーワード： スポーツサークル， 大衆化， 差異(化)， 多様(性)

### 【抄録】

日本の大学スポーツは、運動部とスポーツサークルの二重構造で成立している。運動部は数多くの先行研究が積み重ねられているが、スポーツサークルが誕生した時期や歴史的経緯については、先行研究では実証的に解明されていない。

そこで本研究は、1950 年代から 80 年代の早稲田大学に焦点を当て、スポーツサークルが、いつ、どのようにして、どのような理由から成立したのかを実証的に明らかにした。また、上記の課題の検討を通じて、スポーツサークルの歴史的評価や「日本のスポーツ論」について論じた。

本論文の結論は、以下のとおりである。

日本の大学でスポーツサークルが誕生した背景には、1920 年代以降の大学運動部の高度化があった。私大の運動部の競技レベルが高度化しトップアスリート養成の拠点となる一方で、練習や選手間競争が激化し、厳格な上下関係が日常化する中で、多くの学生が淘汰されたり、参加を断念したりすることとなった。そのような学生たちがスポーツをするために組織したのが、スポーツサークルであった。

こうした経緯から、設立当初のスポーツサークルは「素人歓迎」や「楽しさ」「緩い上下関係」といった運動部との違いを強調して活動が行われた。大学からの支援は少なかったが、学生たちが自ら活動場所を見つけたり、喧々諤々の議論を経て方針が立てられたりして、安定した活動が行われるようになった。

1970 年代後半以降には、大学の枠を超えたサークルのリーグ戦や大会も組織されるようになっていった。対外試合への勝利と自由・平等な組織運営を両立するために、ランキング制度や選挙、出率、総会等、サークルごとに様々な工夫を凝らした実践が行われていった。また、スポーツサークル数が増加して、一競技に多数のサークルが存在するようになるなかで、特色として「ミーハー禁止」等の方針を打ち出すサークルも現れるなど、団体や個人の競技志向や方針の違いといった差異を含む、多様な活動が行われるようになっていった。

スポーツサークルは、1960 年代以降に早大以外の大学でも次々と誕生した。その背景には、高度成長期の学生数の増加、学生の経済状態の改善、スポーツ施設数の増加、学生運動等の要因があった。

このような歴史的事実から、スポーツサークルはスポーツの大衆化に重要な貢献を果たしていることや、「日本のスポーツ論」は主に運動部で見られるもので、日本においても非競技志向で楽しみ重視のスポーツが行われていたことが明らかとなった。

スポーツ科学研究, 19, 84–118, 2022 年, 受付日: 2021 年 12 月 3 日, 受理日: 2022 年 11 月 30 日

連絡先: 中村哲也 7808520 高知大学 高知市曙町 2-5-1

t-nakamura@kochi-u.ac.jp

## I .はじめに

### 1. 問題意識

現代日本の大学において、課外活動として行われるスポーツは、大きく二分することができる。ひとつは「体育会系」「運動部」と呼ばれるもので、当該大学の学生だけで組織された大学公認の運動部が、大学から人的・経済的・制度的支援を受けて活動するものである(以下、運動部)。もうひとつが、スポーツサークルである。

スポーツサークルは、スポーツをすることを目的に組織された団体ではあるが、運動部とは異なつたいくつかの特徴がある。例えば、運動部は大学当局の公認をうけて活動するのに対して、スポーツサークルは公認されている団体と公認されていない団体の両方が存在する。公認団体は大学当局から経済的・制度的支援を受けられる一方で、活動内容に一定の条件や制約が課せられる。公認されていない団体の場合は、大学からの支援は皆無であるが、その活動には条件や制約がない。

あるいは、運動部は基本的に一大学の学生だけで組織されるのに対して、スポーツサークルは、一大学の学生だけで組織されるものと複数の大学の学生で組織されるものの両方がある(インカレサークル)。運動部は基本的に一つの競技に専念するが、スポーツサークルは、単一競技の団体も複数競技の団体もある。運動部は、基本的に大会やリーグ戦での勝利や記録の追求を目的としているが、スポーツサークルは、勝利や記録を追求する団体もあれば、スポーツを楽しむことや会員の親睦・交流、イベントなど、多様な目的をもっている。

現代日本の大学では、一般的に、一大学のなかに運動部とスポーツサークルの両方が存在している。多くの場合、学内で最も競技力が高いのは運動部だが、団体数や会員数ではスポーツサークルが運動部を上回っていることが多い。2006年に松尾が8大学を対象に行った調査によると、運動部の学生 13.8%に対して、スポーツサークルに所属する学生は 36.5%と約 3 倍であった(松尾 2006:94)。2020 年の早稲田大学(以下、早大)においても、運動部は 44 部 2,317 名に対し<sup>1</sup>,

スポーツサークルは 249 団体 10,744 名であった(マイルストーン編集会編 2020)。現代日本の大学スポーツは、対外試合での勝利や記録の更新・向上といった競技力の高度化を運動部が担う一方で、各自の競技力や競技経験、競技志向に応じて誰でも参加できるというスポーツの大衆化をサークルが担う、という機能分化によって成立しているといえよう。

しかし本来、運動部であれスポーツサークルであれ、「同好の士が集まって好きなスポーツを行う集団」という意味では、両者は同じもののはずである。運動部の誕生は、明治中期に放課後や休日にスポーツを楽しむことを目的とした学生たちが組織したことであった(日下 1996, 坂上 2001)。ただ、スポーツ史の先行研究では、研究者の関心が運動部に集中する一方、スポーツサークルについては、いつ、どのような経緯で、なぜ成立了のか、という基本的なことすらほとんど分かっていないのである。

### 2. 先行研究

日本において、「文化運動を担う小さい集団」が「サークル」と呼ばれるようになったのは、1930 年代前半のことであった。当初は左翼運動の影響が強く、「革命思想を日本の大衆の中に作り出してゆくための文化運動の小単位」を意味していたが、戦後には「顔見知りの仲間が自発的にする文化運動というくらいの意味」となった(鶴見編 1976:3-4)。大沢は、「職場や地域や学校のなかで、あるいはその枠をこえて」「自分たちの欲求の充足や自分たちの課題の解決を目指して」作られた「自主的な集まり」を「サークル」と定義し、1955 年から高度成長期にかけて、量的に拡大していくことを指摘している(大沢 1976:72)。

こうしたサークル活動については、文学や宗教等の学習会や政治団体・住民運動まで多様なサークルを取り上げた思想の科学研究会編(1976)や天野(2005)、戦後のうたごえサークルを中心とした河西(2016)、『詩集下丸子』を刊行した文学サークルである下丸子文化集団を扱った道場(2016)といった研究が積み上げられてきた。これらの研究では、各サークルの実態や特徴、団

体の結成・解散等の経緯が詳述されるとともに、サークル活動・団体の多様性や高度成長期における量的拡大など、本研究で取り上げる大学スポーツサークルと共通する点も多くある。一方で、これらの研究の対象はすべて文化活動や社会運動系のサークルであり、スポーツサークルは全く取り上げられていない。

一方、大学におけるサークル研究は、矢内原忠雄が主催する学生問題研究所による調査がおこなわれたり、大学の「レジャーランド化」を象徴するものとして批判的に言及されたりしてきたが、近年は、大学教育や大学内外の環境の関連を分析する、カレッジ・インパクト研究の一環として、サークル活動が学生生活に与える影響等が分析されるようになっている(橋本 2010)。その代表的な研究者である岩田は、1970 年代から 90 年代にかけて、大学サークル加入者数・団体数の増加や、サークルの「群小化・分散化」、大学生の個人主義化の傾向を見るとともに、その背景として大学生の生活費や娯楽嗜好費が増加したことを指摘している(2003a, 2003b, 2005)。

スポーツサークルそのものに関する研究は、1960 年代後半から 70 年代にかけて、岡(1968)、八島(1968, 1969)、井之上ら(1972)、兵藤(1979)などによる研究が行われてきた。これらは、大学でスポーツサークルが拡大していくなかで、それについての量的調査や意識調査を行っている。これらの研究では、スポーツサークルに参加する学生が運動部のような練習や規律の厳しさを避けていることや、スポーツの楽しさを重視する活動を自発的に行っていたことなどが指摘されている。一方、これらの研究は、スポーツサークルという新しい現象を同時代に調査したものであるため、スポーツサークルが誕生した歴史的な経緯やその活動の変化、社会的背景等について、ほとんど言及されていない。

一方、中村は、1960 年代後半以降のスポーツサークルやニュースポーツを対抗的なスポーツ文化としてとらえる。すなわち、スポーツサークルやニュースポーツの隆盛は、「『速さ』や『強さ』を争って勝者や敗者を決めることよりもスポーツすることの面白さ、楽しさ、嬉しさ、喜び等の体験を

大切にしながら、返す刀で『オールドスポーツ』が内包している非人間性やそれを支持するスポーツ体制を批判、告発し始めたことを意味している」と述べ、スポーツサークルの拡大に「非人間的」な運動部への「批判、告発」を読み取っている。他方、中村はスポーツサークルでは「面白さや楽しさが個人の感覚的な満足として捉えられ、その『質』の高低深浅等が問われ」ず、スポーツの面白さや楽しさ、 ureしさや喜びの「背後にある努力の量と質が無視され、それが人格形成に果たしてきた意味や価値も不間にされる」と述べ、スポーツサークルの努力の量や質、人格形成上の意義に疑問を呈している(中村 1991:177–178)。

スポーツサークルの誕生・拡大の背景に、運動部批判があるとする中村の指摘は重要で、本研究でもその視点を継承している。しかし一方で、スポーツ活動の評価に際して、スポーツの「面白さや楽しさの質」、スポーツにかけた「努力の量と質」やそれを通じた「人格形成」を重視する中村の視点は、運動部中心の価値観に偏っているうえ、スポーツサークルが、スポーツの大衆化に果たしてきた機能を軽視しているように思われる<sup>2</sup>。

さらに、中村の論考は、スポーツサークルが誕生・拡大した時代に生きた当事者としての実感が強く、スポーツサークルの認識が画一的で、組織や活動の多様性についての認識を欠いているように思われる。中村自身が直接見聞した経験があるせいか、議論の根拠となる事例・史料が不明という問題もある。

松尾は、運動部は「トラディショナル、かたい、ハイクラス、プロフェッショナル、ヘビー(重き)、上下関係が強く高圧的」なイメージで「閉鎖的なタテ型集団」とされる一方、スポーツサークルは「モダン(新しさ)、やわらかい、カジュアル、素人、ライト(軽い)、上下関係が弱く、民主的」というイメージの「開放的なヨコ型集団」と、対照的なイメージや集団的特質をもつことが明らかにされている(松尾 2006:95–96)。しかし、そのようなイメージや集団的特質がいつ、どのようにして形成されたのか、という歴史的要因は明らかにされていない。

また、本研究においてスポーツサークルの活動

を実証的に解明することは、「日本のスポーツ論」の精緻化にも資するであろう。「日本のスポーツ論」とは、日本におけるスポーツの価値観が武士道の影響を受けたことにより、精神主義や勝利至上主義、娯楽性の欠如等の問題をはらむことになったと言われているものである(高津 1994)。 「日本のスポーツ論」は日本のスポーツの問題点を指摘する一方で、全体の等質性、武士道精神の自明性、「日本の」という概念の価値拘束性等、分析概念としての問題点や、異質部分の実証研究の不足も指摘されている(小野瀬 2002, 岡部 2021)。日本のスポーツ界において、長年指摘されてきた問題が、いつ、どこで発生し、なぜ存続してきたのか、ということを正確に理解し、その構造を明らかにするためには、「日本のスポーツ」とは異質なスポーツのあり方について実証・解明する必要があると思われる。

### 3. 課題の設定

そこで本研究は、1950 年代から 80 年代に早大を中心とした日本の大大学において、スポーツサークルが誕生・拡大した要因、およびその実態を、大学スポーツをめぐる状況やスポーツサークルの実態、およびそこに参加していた人々の意識から、実証的に明らかにすることを課題とする。

本研究では、上記の研究課題を進めるにあたって、3 つの方法的視角を採用した。

視角の第一は、研究の主たる対象であるスポーツサークル参加者の視点である。スポーツサークルに参加した人々の残した資料やインタビュー調査、サークル紹介冊子を史料として用いることで、スポーツサークルが誕生・拡大していった経緯やその理由、活動の実態、参加者の意識、団体数の変化等について明らかにしていく。

二つ目の視角は、運動部の視点である。早大を中心とした大学運動部の部史や選手・指導者の回想録、新聞記事等から、大学運動部の変化や活動の実態、選手・指導者の意識などを見ていくことにより、スポーツサークルが誕生する背景となった大学運動部の状況や、スポーツサークルが誕生・拡大したことで運動部が受けた影響についても明らかにしていく。

第三の視角は、進学率の上昇や大学生の生活費、スポーツ施設数、学生運動等、高度経済成長期の大学生、および大学スポーツに影響を与えた社会的背景を見ていくことで、大学スポーツサークルの誕生・拡大の要因を構造的に明らかにしていく。

これにより、日本の大学運動部や日本社会の構造的变化を背景にして、日本の大学でスポーツサークルが、誕生・拡大し、大学スポーツの二重構造が形成するようになった過程が、当事者の意識や行動に即して明らかにすることが可能となる。また、こうした作業を通じて、「非競技志向」とされるスポーツサークルの団体や会員それぞれの間にある方針・意識の差異や、様々な団体が多様なスポーツ実践を行うことの意味なども明らかになるであろう。

本研究において、早大を主な研究対象としたのは、同校は明治期から現代に至るまで高い競技レベルの運動部を擁し、日本の大学スポーツを牽引してきただけでなく、後述するようにスポーツサークルにおいても他大学に比べて早くから組織的な活動が行われてきたからである。加えて、同校及び同校公認サークルが発行してきた史料により、スポーツを含む各種サークルの団体数や活動内容・活動方針等を、史料に基づいて実証的に把握できる。運動部のみならず、スポーツサークルも含めてまとまった量の史料を入手できる大学は決して多くはないため、同校を中心に本研究を行うこととした。

### 4. 方法

本研究では、早大の運動部、およびスポーツサークルに関する実態を解明するために、運動部各部の部史、早大運動部の指導者や選手の自伝・回想録、『早稲田大学百年史』をはじめとした大学当局発行の史料・文書、『早稲田大学新聞』『早稲田スポーツ』『マイルストーンエクスプレス』等、早大の学生団体発行の逐次刊行物を主な史料として用いた。

また、スポーツサークルの活動実態や当事者の意識を明らかにするために、2014 年から 2016 年にかけて、早大のスポーツサークル 4 団体に所

属経験をもつ 21 名の方に計 19 回のインタビュー調査を行った。

本研究でインタビュー調査の対象となったスポーツサークルは、早大の中でも比較的早くから活動を行ってきた団体を競技別に選定し、筆者が各団体に対して調査協力を依頼した。筆者からの依頼に対して、代表者から調査に協力いただけるとの回答をいただいた早稲田テニスクラブ(以下、WTC)、稲穂キッカーズ(サッカー。以下、稲穂)、早大バレーボール同好会(以下、VB 同好会)、柔道会の 4 団体が、調査の対象となった。

インタビュー調査は、団体の代表者の方から、在学年代の異なる 5–6 名の方を紹介いただき、個別に半構造化されたインタビューを行った。イ

ンタビュイーへの質問は、以下の 8 項目である。「インタビュイーの方の経歴・スポーツ歴」、「サークル創設時の経緯」、「サークルの活動状況(1 週間当たりの練習日数・時間、場所、参加人数、試合・リーグ戦等)」、「同年代のメンバーがサークルに参加した動機、きっかけ」、「サークル活動の中で苦労したこと、大変だったこと」、「サークル活動のなかで充実していたこと、楽しかったこと」、「現在のサークル活動との共通点、相違点」、「その他思い出、印象に残っている出来事等」で、インタビュイーの回答に対して、筆者がさらに追加の質問をすることもあった。

インタビュイーの氏名、性別、所属団体、インタビュ一日時、入学年は以下のとおりである。

表 1 インタビュイー一覧

No.	氏名	所属団体	性別	インタビュ一日	入学年
1	上野 治	早稲田テニスクラブ	男性	2016/1/11	1954
2	姫野 修佐 木下 敏郎	稲穂キッカーズ	男性 男性	2014/12/28	1960 1962
3	多田 和夫	早大バレーボール同好会	男性	2014/8/21	1966
4	林 政郎	柔道会	男性	2015/8/28	1967
5	立原 健夫	早稲田テニスクラブ	男性	2016/3/5	1968
6	二神 光	柔道会	男性	2015/8/25	1968
7	石原 利広	早大バレーボール同好会	男性	2014/8/19	1968
8	北川 隆雄 大平 由美	早稲田テニスクラブ	男性 女性	2016/3/17	1975 1977
9	高橋 善彦	稲穂キッカーズ	男性	2015/2/12	1976
10	関 義久	柔道会	男性	2015/8/26	1978
11	伊藤 直樹	稲穂キッカーズ	男性	2014/12/27	1981
12	舛田 和明	早大バレーボール同好会	男性	2014/8/21	1981
13	藤見 聖也	稲穂キッカーズ	男性	2015/2/1	1983
14	三好 雅弘	早稲田テニスクラブ	男性	2015/11/21	1983
15	S H	早大バレーボール同好会	女性	2014/9/6	1983
16	関根 弘和	柔道会	男性	2015/8/24	1985
17	O K	柔道会	男性	2015/8/24	1993
18	S M	早稲田テニスクラブ	男性	2016/3/21	1994
19	齊藤 幸一	早大バレーボール同好会	男性	2014/10/14	2011

注記: インタビューに際して、氏名の公開に同意された方は実名を表記している。No.15, 17, 18 の 3 名の方は、イニシャルでの公開に同意されたため、イニシャルで表記している。以下、インタビューからの引用については、引用部に上表の No. を記す。

インタビューに際して、史料(非刊行史料も含む)を提供していただけるインタビュイーもあり、本稿では、適宜それらも用いて研究を行った。

## 5.構成

本論文は、上記の課題を解明するために、以下の構成とする。

IIでは、1920 年代から 1950 年代における早大運動部の活動の実態について、同校の運動部史や指導者・部員の回想録等から明らかにする。

IIIでは、早大の一般学生がおかれたスポーツ環境を概観したうえで、1950～60 年代にインタビュー調査の対象となった 4 つのスポーツサークルが設立された経緯について、史料とスポーツサークル関係者へのインタビュー調査から明らかにする。

IVでは、1960 年代後半から 80 年代におけるスポーツサークルの活動の実態や参加者の意識について、史料およびスポーツサークル参加者へのインタビュー調査から明らかにする。

Vでは、1960 年代から 80 年代における早大以外の大学へのスポーツサークルの拡大の様相、およびこの時期にスポーツサークルが誕生・拡大した背景について、社会経済的な要因から明らかにするとともに、それが大学運動部に与えた影響についても検討する。

最後に、上記の作業を通じて、本論文の課題にこたえるとともに、日本におけるスポーツの自由と自治について、「日本のスポーツ」との関係から論じることとする。

## 6.サークルの概念と早大における分類

本研究で用いるサークルの概念及び早大における分類は、以下のとおりである。

「サークル」は、大学生が自主的に組織して、学術・芸能・宗教・スポーツ等の活動を実施・運営する団体のことである。サークルの中で、大学に団体の名称や活動内容を報告し、大学から活動場所や経済的支援を受けて活動をするのが、「公認サークル」である。一方、「非公認サークル」は、大学への届け出や報告等がなく、活動に際しての許可や制約もないが、大学からの支援などもない団体を指す。

早大では、さらに公認サークルにも「学生の会」と「同好会」の 2 種類がある。学生の会は、早大において「学術の研究、芸能の修練、宗教的情操の育成、趣味の涵養等により、大学における学生生活の充実向上をはかる目的を以て」「二学部以上にまたがり、二十名を超える学生によって組織される団体」と定められている。学生の会は、学内に部室の割り当てがなされるが、専任教職員を会長としておき、名称・目的・事業・幹事の連絡先・会員の資格・会計・事業報告等を、大学に毎年報告しなければならなかった(早稲田大学学生部 1964:63)。

同好会は、早大当局への届けは出しているものの、学生の会の基準を満たしていないサークルを指す。同好会は、公認サークルではあるものの、サークルとして早大当局から最も支援を受けることのできる学生の会の前段階として位置づけられており、同好会の中から「例年数団体が学部長会の審議を経て『学生の会』に承認され」ることが通例であった(早稲田大学学生部 1967:46)。

上記の分類を図にすると、図 1 のようになる<sup>3</sup>。

本稿で取り上げたスポーツサークルでいうと、WTC は、1956 年に非公認サークルとして結成され、翌 1957 年に学生の会となった。稲穂は 1961 年に非公認サークルとして創設されて、1967 年に同好会となった。VB 同好会は 1963 年に非公認サークルとして創設され、1967 年に同好会に、1972 年に学生の会になった。柔道会は 1968 年に非公認サークルとして創設され、翌 1969 年に同好会になっている。

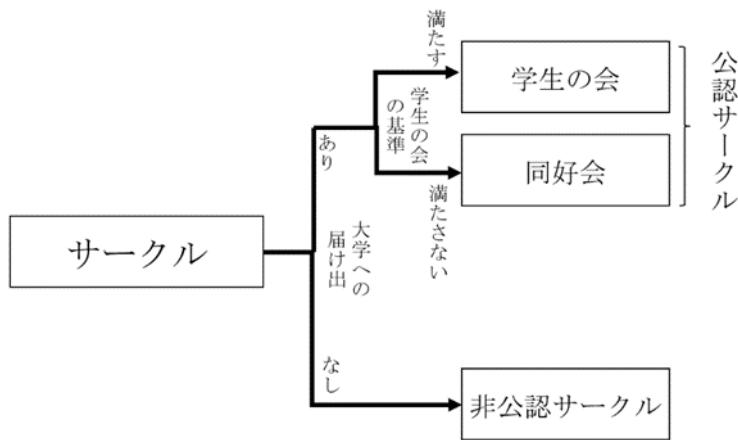


図 1 サークルの分類

## II. 1920 年代から 1960 年代の早大運動部

日本の高等教育機関で課外活動として行われるスポーツは、1880 年代半ばに組織化されていった。その端緒は、1886 年の東京帝国大学運動会であったが、以後、東京高等商業運動会（1889 年）、第一高等中学校校友会（1890 年）、慶應義塾体育会（1892 年）など、高等教育機関において校友会とその下部組織としての運動部が成立していった。早大の前身である東京専門学校は、1897 年に体育部が成立し、擊劍部、相撲部、庭球部、野球部等の活動が始まった（日下

1996）。これ以後、各大学で運動部が次々と組織化され、大会やリーグ戦が創設されたり、競技団体が設立されたりしていった。

このように大学運動部は、近代日本におけるスポーツ普及の拠点であったが、同時に競技レベルの高度化の拠点でもあった。表 2 は、日本が初参加した 1912 年のストックホルム大会から 1964 年東京大会までのオリンピック（以下、五輪）出場選手の総数とそれに占める学生・私大生・早大生の数・割合を示したものである。

表 2 五輪選手団における学生選手の数と割合

年	全選手数	学生選手数(%)	私大生数(%)	早大生数(%)
1912	2	2(100)	0	0
1916			非開催	
1920	15	10(66.7)	3(20.0)	1(6.7)
1924	19	11(57.9)	5(26.3)	0
1928	43	29(67.4)	21(48.8)	15(34.9)
1932	131	92(70.2)	75(57.3)	27(20.6)
1936	179	111(62.0)	83(46.4)	34(19.0)
1940		非開催		
1944		非開催		
1948		不出場		
1952	72	46(63.9)	35(48.6)	7(9.7)
1956	120	62(51.7)	51(42.5)	5(4.2)
1960	167	76(45.5)	57(34.1)	7(4.2)
1964	357	128(35.9)	104(29.1)	23(6.4)

(出典) 中澤(2010), および, 東原(2013)より筆者作成。

これを見れば、戦前期から 1950 年代までは五輪選手に占める学生の割合が一貫して 50%を超えており、学生選手が日本の競技スポーツの高

度化を牽引してきたことがわかる。また、1912 年ストックホルム大会の代表選手には私大生は一人もいなかったが、1920 年代から 30 年代に急増し、

1932 年ロサンゼルス大会では、選手団の 70.2% が学生で、私大生で半数を占めていた。1920 年代から 30 年代に日本のトップアスリート養成は、私大が担うようになっていたといえよう。

そうした私大のなかでも、五輪選手を最も多く輩出していたのが早大であった。早大は、上記の期間中に日本が参加した五輪 10 大会中 8 大会で代表選手を輩出した。1928 年のアムステルダム大会では、選手団の 3 分の 1 を超える 15 名の選手を送り出した。この期間における全学生選手 567 名のうち早大生は 119 名 (21.0%) にのぼり、最多となっている。1920 年代以降、私大の運動部は日本のトップアスリート養成の拠点となっていたが、そのなかでも最も多くの五輪選手を輩出したのが、早大の運動部だったのである。

そのため、早大運動部は、多くの競技で、日常的に厳しい練習が行われ、選手同士が切磋琢磨する環境が生まれていた。例えば、1900 年代から日本を代表する強豪として知られていた野球部は、1920 年に監督に就任した飛田忠順のもとで、「練習常善」をモットーとした厳しい練習が行われた。飛田は選手たちに「楽しみを楽しみとするのではなく、苦しみを楽しむために野球の修行に没頭する心がまえ」と「汗と涙と血のにじむ練習」を求めた(飛田 1960:214–215)。そのため、当時の野球部の練習は、「激しさだけ」ではなく「一分の精神的のスキも見逃さないきびしさが」があり、「ほとんど休みらしい休みがな」かったという(芥田 1981:44–46)。

1922 年に創設された全日本庭球選手権大会男子シングルスの初代王者となった福田雅之助をはじめ、多くの日本選手権優勝者を輩出した庭球部でも、1920 年代半ばには日常的に厳しい練習が行われていた。当時の庭球部にとっては、9 月の早慶戦が最も重要な試合であったため、「夏休みは八月十日から夏季練習」が行われ、「練習が済んで井戸の水が無くなるまで、水を撒くと[夜]八時過ぎになった。朝九時から練習を始めるので、われわれの生活は殆どコートの上で行われ、夏季練習は雨降り以外は一日の休日もなく、早慶戦の日まで続いた」という(稲門テニス俱

楽部・早稲田大学庭球部編 1974:449)<sup>4</sup>。

庭球部には「多数の中学生の有望選手が入って」きたが、「病気で挫折する者多数、また部則を犯して除名になる者、毎日の猛練習に耐えかねる者、またローラとライン引きで練習が出来ずに退く者が続出し」し、「昭和元年に庭球部へ入部した総数は約百名位」であったが、翌「昭和二年の新学期に残ったのは」わずか 3 名であった(稲門テニス俱楽部・早稲田大学庭球部編 1974:452)。

ア式蹴球部は、戦前から天皇杯で優勝(OB で構成される WMW クラブも 1 度優勝)したり、日本代表選手を輩出したりする強豪で、地方から上京した新入生が恐れをなすほどの「超スパルタ練習」が行われていた。

昭和 7 年 4 月、早稲田第一高等学院に入学した私 [加茂健] に、ア式蹴球部へ入らないかと誘ってくれたのは堀江忠男先輩であった。(中略) 最初に驚いたことは部員の多いこと、ボールの数が多いことであった。部員の人数は 60 人位だったと記憶しているが、井出主将、工藤マネジャーの練習に対する苛烈さには全く驚いた。(WMW50 年史編集委員会編 1977:217–218)

1939 年に卒業した加茂正五も「入部当時のア式蹴球部の印象は、第 1 に工藤監督及び先輩諸公の厳格なスパルタ式訓練、練習量にあ」つたが、「先輩、後輩、また同僚間におけるいわゆる『グッドコミュニケーション』が存在し、若い者をして烈しい訓練、過大な練習量にもかかわらず、よしやってやろうという反発精神、『やる気』を旨が持つふん囲気が東伏見グラウンドにみなぎっていた」という(WMW50 年史編集委員会編 1977:222)。1920 年代以降、早大運動部は日本を代表する強豪として厳しい練習が日常的に行われて、競技力を高めていったが、庭球部のように大半の部員が 1 年以内に退部する状況も生まれていた。

一方で、当時はまだスポーツ施設の整備が不十分なため、年間を通じて専門の練習を行うことが難しく、オフシーズンには他の競技を行ったり、

監督やコーチといった指導者がおらず、選手たちの自主的な練習が活動の中心となったりしていた競技もあった。

例えば水泳部は、1928 年アムステルダム大会で銀(男子 800mリレー)・銅(男子 100m自由形)2 つのメダルを獲得した高石勝男や、1932 年ロサンゼルス大会・1936 年ベルリン大会で 2 大会連続メダリストとなった牧野正蔵(1932 年男子 1500m自由形銀メダル, 1936 年 400m自由形銅メダル)らを輩出していた。

ただ、当時は温水プールがなかったため、冬季練習は「陸上運動、特にラグビーを主」としており、「練習は四月の新学年早々から始まる」が「四月中は練習というよりも水に入るのが仕事で」「五月からが本格的な練習入りだが、特定のコーチがいるわけではなく、自主練習に徹して」おり、「本当の水泳の時期といふものは、一年の内三ヶ月位なもの」であった(稻泳会 1991:72, 77, 102)。

競走部も、1928 年アムステルダム大会で日本人初の五輪金メダリストとなった織田幹雄(三段跳), 1936 年ベルリン大会銀メダリスト西田修平(棒高跳)らを輩出していた。しかし、織田の学生時代は「練習計画はすべて自分で決め、自主的に取り組まなければなら」ず、「トレーニングといつても当時はいま[1977 年]とちがい、科学的にウェート・トレーニングをやるということはなく、「遊びみたいにバスケットボールやラグビーをしては、その合間にそれぞれの種目練習をしていた」という(織田 1997:82)。

しかし、これらの部でも競技レベルの上昇やスポーツに対する社会的な関心の高まりの中で、次第に練習が激化していった。1938 年の早慶戦で慶應義塾大学水泳部に初黒星を喫した早大水泳部は、敗戦直後に「緊急臨時総会」が開催され、「現役は丸坊主、OB 大集合で」「先輩から一人ずつ懇々と『叱声』」を受けて「大反省」し、「早稻田復活の『カギ』は猛練習あるのみ」として、「通常練習量に加え、全員百メートルのベストから五秒落ちの制限タイムで一分休みのインターバル十五本、オーバータイムは一回増しのペナルティーという地獄のハードトレーニング」を行ったという(稻泳会 1991:110-111)。

1958 年に水泳部監督に就任した小柳清は、「一、やる気のある選手のみ、オレについてこい。一、克己心のない選手は去れ。一、弱い選手、努力しない選手は、他の選手の妨げになるので去れ」という方針を示し、日常的に非常に厳しい練習を課すだけでなく、実力や練習量が十分ではない選手に退部を求めた(稻泳会 1991:237)。

小柳の指導を受けて、1956 年メルボルン大会と 1960 年ローマ大会で計 4 つのメダルを獲得した山中毅は、練習のときに「満足のいくタイム」をだしても、小柳から「オイ！ 誰がそんな泳ぎで引っ張れといった」「ヤマナカ、お前、いつから大選手になった」と「散々怒鳴れた」うえ、「オレがいいというまで泳いでろ」という指示の下、「水温十三度」のなかで「三万メートル以上泳がされ」て「全身けいれん」になることもあった(稻泳会 1991:237-238)。

水泳部の寮では、新入生は入寮早々に「新人集合」を命じられ、上級生から「挨拶がなっていない」「掃除ができない」「言葉遣いが悪い」「態度が横柄だ」などの理由で「指導とは名ばかり、罵声、ののしりといった類の、それは恐ろしい形相でのお叱り」を受けた。「新人集合」は「当初三日に空けず」に行われ、新入生は「行く先々の不安」で「恐怖のどん底」に叩き落とされたという(稻泳会 1991:279-280)。

こうした厳しい上下関係や部内の暴力も、日常的なものとなっていた。例えば、ア式蹴球部は 1940 年頃には部員が 1 軍から 4 軍まで分けられていたが、「サッカー・グラウンドは 1 面と半面あつたが、一軍が半面、逆の半面を二軍、そして別の半面を三軍と使うと四軍は練習場所がない」ため、四軍の部員はほとんどサッカーができず、「“球磨き”とクラスメートから呼称される生活」を送らざるを得なかった(WMW50 年史編集委員会編 1977:233)。

競走部でも、1949 年に中村清が中長距離部門の監督に就任すると、日々の練習は非常に厳しいものとなった。のちに映画監督となる篠田正浩(1950 年入学)は「もともと、私は一流のアスリートになれるとは思ってもみなかった」ため「入部し

た時の私は、周囲に強烈なランナーを眺めながら、自分なりのエンジョイの仕方があると考えていた。ところが、そこは地獄の窓の底であった。先輩はすべて鬼で、私は針の山に追い立てられるか弱い衆生の一人であり、中村清から「ビンタを食らうこともたびたび」だったという(早稲田アスレチッククラブ編 1984:177)。

「当時[1957年]『ワセダのアップ』として有名なジョギングは、2000mぐらいをもの凄いスピードで突っ走る」もので、「ジョグやアップなどという生易しいものではなく、ファイトの爆発のようなもの」で「投てきの選手たちには過酷な試練」だったという(早稲田アスレチッククラブ編 1984:207)。

1959年に大学選手権で優勝したり、多くのプロ野球選手を輩出したりしていた野球部は、新入生にとって「昔の軍隊」のような「鉄拳制裁の世界」であった。「入って一週間か十日の間はランニングばかりで、ボールなんか一切握らせてくれない。毎日野球をやってるなんて気分は、かけらほどもな」かったという。「一年生は練習では、フリー バッティングの投手ばかりやらされ」「同期の投手のなかで、五体満足な体で卒業した者は誰一人としていなかった。無事に卒業できたのは自分だけしかいなく、みんなヒジや肩を壊されるはめになつた」という(小川 1992:120-121)。

庭球部も、「下級生にとって、コート整備は生活の中心」で、下級生にとって「上級生と下級生の待遇差別」と感じられるものであった。しかし、それ以上に「一番つらく感じたことは、上級生は自分たちが下級生だった時代の苦しみや悩みを忘がちで、下級生に対して、思いやりが足りないようなことがしばしばある」ことであった。そのため「下級生が強く反発感を持つようになって、上級生と下級生の間は溝ができてしま」い、「たえきれない下級生はやめて行」ったという(稻門テニス倶楽部・早稲田大学庭球部編 1974:524)。

1920年代以降、私大の運動部はトップアスリート養成で中心的な役割を果たすようになり、早大はそのなかでも最多の五輪出場選手や、全日本レベルの大会で優勝する選手・チームを多数輩出した。早大の運動部には、オリンピアンやトップアスリートになることを目指す学生達が集まり、

時には暴力も受けながら、厳しい練習に取り組み、高い競技力を身につけて、日本を代表するアスリートとなっていました。その結果、1964年に開催された夏季オリンピック東京大会には、在学生から23名が出場したほか、戸山キャンパス内にある記念会堂でフェンシング競技が実施された。

一方で、下級生や控え選手は、球拾いやコート整備等の雑用や、バッティングピッチャー等の練習の手伝いばかりが課された。厳しい練習や上下関係、雑用中心の生活についていけなくなったり、レギュラーになることをあきらめたりした部員は、次々と退部した。1950年代以降、早大をはじめとした私大の運動部は、多くのトップアスリートを輩出する一方で、実力によって多くの部員が淘汰される、過酷で競争的な環境となっていたのである<sup>5</sup>。

### III. 早大スポーツサークルの誕生

上述したとおり、1920年代から高度成長期にかけて、早大運動部は多くのトップアスリートを輩出する一方で、選手たちは肉体的にも精神的にも厳しい環境のなかで日常を過ごすようになっていたが、そのような運動部に所属する学生は、学生数全体から見れば決して多くはなかった。1960年の早大運動部員の総数は1,992名(うち女子111名), 1961年は1,990名(うち女子113名)であったが(早稲田スポーツ新聞会 1960, 1961), それは1960年の早大の学部学生数30,959人の6.4%, 1961年31,725人の6.3%にすぎなかつた(早稲田大学大学史編集所編 1997)。

約6%の運動部の学生は、日常的に学内の運動場やグラウンド等の施設を利用して活動する一方、運動部に所属していない大多数の一般学生には、スポーツをするための場所や施設はほとんどなかつた。

大隈講堂前で今キヤツチボールが盛んである。狭い場所でのキヤツチボールは通行人に迷惑をかけるが、場所がないの原因だ。一万七千人の学生のいる早稲田大学には、キヤツチボールする場所さえないということである。「運動部の使う設備はあるが、一般の学生の設備がない」ということは、早稲田の学生の等しく感じているところであ

る。

「スポーツをやりたいと思っても、実際には出来ない」  
(中略)

天下の早稲田に一般の学生の使えるピンポン台一台ないのは悲しむべきことである。(早稲田大学新聞会 1982:363)

スポーツ実技の授業は開講されていたものの、「卓球、野球、柔道などの中には」、受講希望者が定員の「十幾倍になるものさえあ」り(早稲田大学新聞会 1982), 一般学生には人気競技種目のスポーツ実技の授業を受講することさえ容易ではなかった。抽選ではなく先着順で受講者が決められることもあったため、「スキーとヨットは徹夜して並んでおかないと受講することもできなかつたという(インタビューNo.1)。しかし、「午前に体育実技で使用する設備は午後は運動部が使用」するため、スポーツ実技の授業を受講したいという「学生の希望に応え」ように「これ以上の設備がない」というのが早大当局の本音であった(早稲田大学新聞会 1982)。

そのため一般学生からは「学生スポーツというものが選手という枠の中に押し込められたある特定の学生たちの私有物であつてはならない」、「スポーツを楽しむことが観るものとプレーするものとに分化してゆく情勢の中で学生の特定個人だけがプレーをするという選手制度の欠陥も是正されなければならない」など、運動部だけが学内のスポーツ施設を独占的・特権的に利用することに批判の声が上がることもあった(早稲田大学新聞会 1982:33)。

1950 年代半ばの早大には、運動部員になるほど高い競技レベルにはないものの、スポーツをやりたいと思う一般学生が多数存在していたのであり、こうした学生たちがスポーツをするために自発的に組織したのが、スポーツサークルであった。

早大で最初のスポーツサークルは、1930 年に結成された GW ラグビークラブと思われる(早稲田大学総長室広報課編 1970:202)。しかし、戦前期はスポーツサークルの数も少なく、管見の限り、活動の実態がわかる史料もほとんど見つかってい

ない。1989 年に刊行された『マイルストーンエクスプレス』8 号には、「創立年数」の記載欄があるが、同年に存在していた公認・非公認の全スポーツサークルのなかで、戦前期に設立されていたのは、GW ラグビークラブのみであった(マイルストーン編集会編 1989)<sup>6</sup>。早大において、最初にスポーツサークルが誕生したのは、戦前期であるが、様々な競技のサークルが次々に誕生し、量的に拡大していくのは戦後のことと思われる。

それでは、それぞれのスポーツサークルは、どのような経緯で結成されたのであろうか。以下、本章において、インタビュー調査に協力いただいた 4 団体について、設立の経緯と創設当初の活動の様子を見ていくことにしよう。

## 1. WTC

「日本最初のテニサー」と言われる WTC が結成されたのは 1956 年、創設者の上野治が 3 年生の時であった。上野は小学校で野球をプレーし、中学・高校では卓球部とバーレーボール部に所属していた。上野は、幼少期からスポーツには親しんでいたものの、テニスの経験はなかった(インタビューNo.1)。

上野が WTC を結成するきっかけとなったのは、大学入学後に福田雅之助が担当するテニスの授業を受講したことであった。上野は、テニスをもっとやりたいと思ったが、「運動部[に]入っちゃったら、まず授業は出れな」いことから、「学業とテニスを両立するような形で」活動するテニスサークルの創設を思い立った。そして、学内にメンバー募集の掲示をすると「『やりたい』っていう人が」「20 人ぐらい集ま」ったため、WTC の活動が始まることになった(インタビューNo.1)。

結成当初の WTC の活動は、新宿の朝日生命のテニスコートと、江古田の哲学堂コートの 2 か所が中心であった。活動は「コートの空いてるところでやつてたから」「毎週 1 回あればいい方」で「お遊び程度」の運動量だったという。それでも、「受験やなんやでみんな毒されちゃってね。『とにかく体動かしたい』って、そういうニーズもあつ」て活動が継続し、翌年には早大の公認サークルである「学生の会」への登録が認められた(インタビュー

No.1).

「学生の会」として登録されたことで、早大の学生に配布された冊子『学園生活』には、次のような WTC の紹介文が掲載されることになった。

本会は硬式庭球愛好者からなり、創立五年を経た現在、明るい理想的な学生の会として発展してきている。会員相互の親睦を旨とし、庭球大会対抗戦等数多くの行事を繰り込んで、学生生活を有意義ならしめるよう努力している。テニスの技術の如何にかわらず、本会の活動に大いに参加して部生活と違った学生スポーツを味わってもらいたいものである。(早稲田大学学生部 1964: 80)

スポーツのサークルと言っても私達はセミプロ化した庭球部とは違います。まあ硬式テニス愛好会と言ったほうがいいでしょうか。小麦色の肌の女性と異様に黒い男性とがコートに合宿に白球を追う様子はまさに早稲田の青春という感じです。スポーツマンだけが持っているほがらかさ、清潔さ、それが私達の誇りなのです。体力も技術も精神力も要求されるスポーツですが、ヘタクソでも初めてでも結構。とにかく愉快です。(早稲田大学学生部 1965:89)

「会員相互の親睦を旨」としていること、「テニスの技術の如何」は間わないこと、「ヘタクソでも初めてでも結構」、「とにかく愉快」、そして「まさに早稲田の青春」。同じテニスではあっても「部生活と違った学生スポーツ」、「セミプロ化した庭球部とは違います」という言葉から、WTC は運動部と違いを強調していることが読み取れる。競技力向上や試合での勝利を追求して「セミプロ化」した運動部とは異なる目的、やり方でテニスを楽しむために結成されたのが WTC だったのである。

## 2. 稲穂

稻穂キッカーズは、小松信介を中心となって 1961 年 11 月 10 日に「サッカー愛好会」として設立された。設立総会には、入会希望者 71 名のうち約 50 名が参加した。会員は「高校で[サッカー]をやつた者が 12~3 人」で、「月曜、水曜、土曜の 9 時[から]、練習。その他に日曜日」も活動

することが決まった(早稲田大学稻穂キッカーズ 1987:7)。1962 年春、静岡県榛原町で初めて合宿を行った際に、木下敏郎の提案で「稻穂キッカーズ」に改称されたという(インタビュー No.2)。

稻穂の創設メンバーには「春の新人戦をレギュラーとして全試合に出場」しながらもア式蹴球部を退部した栄隆男もいた。栄はア式蹴球部のレギュラーであったが、「サッカー中心の学生生活を送っている自分にいつのまにか湧いてきた“これでよいのか?”という自省の問い」が「私を捉えて話さなくな」り、「ボールを蹴り続けることはどうていこの何とは名状しがたい重たい間に立ち向かうことは不可能に思えて」退部を決断したという。

しかし、稻穂の活動が徐々に軌道にのってくると、「学生の会」に登録するために会長となる専任の教職員が必要となつたため、ア式蹴球部 OB で同部部長の堀江忠男に、稻穂の会長への就任を依頼することとなつた。「一人で研究室を訪ね“同好会の顧問[会長]に”という私[栄]に[堀江]先生は“厳しい練習よりも楽しみを選ぶというのか”と質問された。弁明は一切せずにお願いのみをすると“まあ、そういう生き方をする学生がいてもいいだろう”とおっしゃって、あっさりと引き受けてくださった」という(早稲田大学稻穂キッカーズ 1992:25-26)。

創設当初の稻穂は、大隈庭園に隣接した空き地で活動をしていたが、ア式蹴球部の練習がない月曜日だけは、東伏見のグラウンドを利用することができた(インタビュー No.2)。そのことについて、1965 年入学の姫野敏郎は、次のように語っている。

「え、こんなとこ[東伏見グラウンド]でできんのか」って。周り見たら、それこそ有名な釜本[邦茂]さんとかね、森[孝慈]さんとか大野[毅]さんとかって、天皇杯で優勝したメンバーで、東京オリンピックに出てた人が練習してるわけよ、壁打ちみたいなところで。後では一緒に練習したりしてね。釜本さんとやつたこともあるんだけど、こんなとこで別メニューだけどできるのかっていうことで、やっぱり[サッカーに]のめり込んできたというのがね。(インタビュー No.2)

姫野によると、稲穂が東伏見グラウンドを利用できたのは、「顧問[会長]の先生が堀江先生で」あったことが、影響したようだ(インタビューNo.2)。稲穂は、ア式蹴球部と同じグラウンドを利用できるという、サークルの中では恵まれた環境で活動でき、それが競技レベルの高い多くの会員を集めることにもつながったと思われる。

一方で、多くの会員数と競技レベルの高い選手を抱えながらも、「運動部ではない」ということは、初期の稲穂の幹部には自分たちの存在意義を悩ませるものであった。1962年度に幹事を務めた岸田道郎は、当時、以下の内容を日記に記していた。

昨年度[1962年度]の小生は、決して有能な幹事ではなかったが、その間、このサッカー愛好会について、種々考えざるをえなかつた。この会は一体何をする会なのであらうか？それが自分の最大の疑問であった。サッカーの好きなものが集まっている。しかし、サッカー部ではない。(中略)早大には数十名の部員を擁する立派な強いサッカー部があるにもかかわらず，“サッカー愛好会会員募集”というポスターを学内に一週間貼りだすだけで、50～100名の人間が集まるということ。これがこの会の最低のリミットだと思う。つまり、この会の存在価値は立派にあるのだ。決して、つぶれることはないし、つぶす必要もない。しかし、いくらこの会が頑張って、練習し、ベストメンバーをそろえてみたところで、おそらく早大のサッカー部には勝てない。ここに上のリミットがある。この中間にふらふらしているのが、当サッカー愛好会なのだ。この中間の相当広い空間の何処にこの会を位置付けるべきなのか。

ともかくサッカーと名のつくものをやる以上、試合をすれば勝ちたい。とくに、対外試合には勝ちたいし、勝つべきだ。そのために、然るべき練習をし、また、ベストメンバーで対戦する。また一方で、サッカー部ではないのだから、会員全部に試合経験をさせるため、然るべき相手も探す。本年度の方針は大体こういうことらしい。(早稲田大学稲穂キッカーズ 1992:8-9)

運動部のように競技レベルの向上や試合での勝利の追求が自明ではないスポーツサークルである稲穂が、どのような方針で活動を行うのか、ということは重要な問題であった。そのため、最初

の合宿では「愛好会は強さを求めていくのか、いわゆる楽しさを求めるのかっていうようなことで、路線闘争じゃないけど、そんな話し合いも」行われたという。「サッカーを続ける以上は強くなろうじゃないか、いろんな相手とやっても負けないチームになろう、ということは練習も厳しくなる」という主張がある一方で、「そんな厳しくなくてもいいんじゃないか。コンパやったり、楽しむことが多くていいんじゃないか」という主張もあったという(インタビューNo.2)。

岸田は最終的に「対外試合には勝ちたいし、勝つべきだ。そのために、然るべき練習をし、また、ベストメンバーで対戦する」と「サッカー部ではないのだから、会員全部に試合経験をさせるため、然るべき相手も探す」という結論を下しているが、これは多様な意見が飛び交う喧々諤々の議論の中で、大多数の会員が許容できる最大公約数的な方針だったと思われる。

草創期の稲穂は、「練習試合といつても、他に同好会などない時代なので、大学の2部、3部のチームと試合するしかなく、東京外大、[東京]都立大などと試合をしたが、勝てるまでになかなかいかなかつた」という(早稲田大学稲穂キッカーズ 1992)。しかし、試合での勝利を目指して、合宿ではアルパド・チャナディ『チャナディのサッカー』を「原語で読んで」、インサイドキックやインステップキックの方法を学んだり、「イギリスはこうやって逆サイドに振るんだ」といった練習もしたりしたという(インタビューNo.2)。

英語の技術書を読んで練習の参考にするほど、稲穂の会員たちは熱心にサッカーに取り組んでいたため、「試合とか練習ではね、走らされたりはし」たこともあったが、「叩かれた」とかいじめやしごきといったものではなく、運動部と違って「上下関係って、そんなに厳しくな」く、「お茶[を]飲む時でも、対等に会話ができるし。いわゆる体育会系のああいったことは何にもなかつた。冗談言つたり、楽しさはそういったところにあ」つたという(インタビューNo.2)。

1965年、木下敏郎と同学年の神崎隆夫を中心になって新関東フットボールリーグという同好会サッカーリーグを立ち上げた。新関東フットボール

リーグの初期加盟校は、稲穂のほか、早稲田理工、明治、中央、慶應キッカーズ、日大理工、法政富士見、慶應工の 8 チームであった(早稲田大学稲穂キッカーズ 1987:3). 新関東フットボールリーグを立ち上げたことで、「本当にサッカーの強さを求めてくようになつたんじゃないかなと思う」と木下は述べるように(インタビューNo.2), 大学の枠を超えた同好会リーグの成立は、同じサークルという立場で競う環境をつくることとなり、そこで勝利がサークルとして目指す重要な目標となつていったのである。

### 3. VB 同好会

VB 同好会が発足したのは、1963 年であった。同じバレーの授業を受講していた「バレーが三度の飯より好きだった」学生 4 名は「体育の授業だけでは物足りない」と感じていたが、「体育会では授業があるからなかなかきつい」とも感じていた。それでも「バレーがしたい」と思った 4 名は「そうだ! 自分達でバレー好きの仲間を集めよう。そして自分たちが好きなバレーを一生懸命やろう」と考え、VB 同好会を立ち上げたという(早大バレー同好会創立 50 周年記念誌編集委員会編 2014:30).

しかし、発足当初は「練習場所が無く」、「理工のグラウンドとか記念会堂の裏とか、場所があればとにかくやった」という。少ない人数で「楽しく和気あいあいと、バレーを楽しんでいた」が、「男臭く」「女の子は、暗黙のうちに入れないということになっててね。入ってもすぐに辞めていっちゃ」ったという(早大バレー同好会創立 50 周年記念誌編集委員会編 2014:30).

1965 年、バレー部の練習場所が、屋外の戸塚コートから 1964 年東京五輪でフェンシング会場となった早大記念会堂に移ると、以後、VB 同好会は戸塚コートを日常的に使えるようになり(稻門バレー部 50 年史編纂委員会 1981:132), 週 3 日「[午後]4 時くらいから 6 時くらいまで」練習するようになった(インタビュー No.3).

VB 同好会には、「ホントの素人」と「中学高校でバレーやり尽くした」「技術的にもベテラ

ン」の両方がいた。1966 年に早大に入学した多田和夫は、中学・高校でバレーボール部に所属し、主将を務めたこともあったが、「練習が厳しい」ため「体育会系に入るのは最初から嫌」で、「同好会だったらゆっくりできるだろう」と考えて、VB 同好会に入会したという(インタビューNo.3).

VB 同好会は、週 3 日練習を行っていたが、練習に出席するかどうかは各自の「自由」だった。「レギュラーとかそういう区別もなく、全員で同じように練習を行っていた。会員の中には、「麻雀同好会みたいな感じの人」もあり、バレーボールを共通点としながらも、活動への参加の度合いはまちまちで「緩い」ものだった。しかし、夏・春休みの合宿での練習は厳しく、「二日目からは階段も下りられない状況」になることもあった(インタビューNo.7).

上下関係も運動部とサークルでは大きく異なっていた。多田が 1 年生の時に明治大学生田キャンパスで行われた試合に出場した際、「上級生が牛乳やパンを、下〔高台にある生田キャンパスの階段を下りた先にあるお店〕の方まで行って買ってくれた。運動部の上下関係が厳しいことは、当時すでに「一般常識」であったため、多田は「大学のサークルってこれほど違うのかな」と強い感銘を受けたという(インタビューNo.3).

合宿の夕食の際、「『飯食ってる時は無礼講だ』って言うんで、『じゃあ無礼講だったら先輩の頭ぶん殴ってもいいんだ』とかいって。こんなやくを先輩の頭にぶつけた」ときは「先輩も流石に怒って、『なんだあ』とか言って喧嘩になつた」というが、運動部と比べて上下関係は厳しいものではなかったことは確かであろう(インタビューNo.7).

1968 年に入学して VB 同好会に入会した石原利広も「体育会に比べて、規律だとか上下だとか、気合いだとか根性だとかいうような僕の嫌いな部分がない。もう上下に縛られるのはあんまり好みじゃなかった」と述べている(インタビューNo.7). VB 同好会では、先輩・後輩の上下関係が全くないわけではなかったが、運動部に比してそれは「緩い」(インタビューNo.7), 「フラット」なものだったという(インタビューNo.3).

VB 同好会は、1960 年代後半に会員数が伸び

悩み、「練習の時、4~5 人ぐらいしかいない時もあって」、「こりやもうだめか、解散か」と深刻に悩んだ」ことわざった。しかし、そんな折に「NHK 特集で“変わりゆく学生スポーツ”っていうの[番組]」の取材と放送があり、「その番組にうちが出てさ、そしたら次の年にドッと[新入生が]入って」来て、安定的な活動ができるようになったという(早大バレーボール同好会創立 50 周年記念誌編集委員会編 2014:31)。

#### 4.柔道会

柔道会は、大阪府出身で中学・高校時代に柔道部に所属し、高校の時にインターハイ出場経験がある畠山嘉一を中心になって 1968 年に設立した。畠山は、大学 2 年時に早大教授で十段の称号をもつ大沢慶己が担当する柔道の授業を受講し、大沢から「君 柔道部に入らないか」と誘われて、柔道部の練習に参加した。しかし、柔道部の「主力部員の多くは 午前中から練習して」おり、「これと同じようにしていたら」「午前の授業にも出ることができない」ことがわかった。畠山のように「一般入試で入学したものは 留年の恐れがあ」つたことや、「一般入試で現役入学し、柔道部に入」った他大学の友人が「授業に出られず、一年から二年に上がれなかつたのを見聞きした直後」であったことから、「一浪して入学した小生[畠山]には、迷惑をかけた親に対しても、留年はできない自覚もあつたので、半月ほど 柔道部に通つたものの 最終的に 大沢先生に事情を説明し、入部をお断りし」た(畠山発行年不明:2-4)<sup>7</sup>。

しかし畠山は、同じ授業を受講していた柔道経験者の友人と「一般入試で入学してきた学生には、今の部活を継続していくのは難しく、大学の運動部のあり方(特に柔道部のあり方)に二人とも疑問を抱いていると言う話にな」り、「それならば 一般学生も参加できる 柔道サークルでも立ち上げようじゃないか? と意気投合した」。そして、「何人集まるかはわからないが、新入生を標的にということで」、1968 年の入学式の日に「大隈講堂前の階段に陣取り、柔道同好会 新入会員募集を横長の紙に書」いて「掲げた」ことが「柔

道会の出発点」となったという。結果的に十数人の新入会員が集まり、設立総会を開催し「会運営の会則なりを 満場一致で採択した」(畠山発行年不明:5-6)。

柔道会を創立直後、畠山たちが直面したのは「いざ練習となった時、まず どこで練習するの? という問題」であった。「当初は何とかなるだろうとの甘い考えていたのだが、なかなか見つからない」。「いろいろ近辺をあつたつたが、なかなか見つからず、仕方なく 恐れも知らず 柔道部へお願いにも行った」が「当然 にべもなく断られた」という(畠山発行年不明:7)。

「会員が それぞれ知恵を出し合って」新宿体育館や「近辺の中学校の道場を借り」て活動し、「日々転々としていて、大変な時期であった」という。「会員のうちの一人が、都立青山高校の柔道部出身者」だったため「彼が 顧問の了承を得て道場を提供してもらえることになった」。「大学前からバスに乗つて 十人に満たない人数で青山高校まで通っていた」が、「時が経つにつれ、当初の人数から 徐々に減少していく参加者」。「夕暮れのバスの車窓から暮れゆく街並みを眺めながら、もう少し近くに道場を見つけないと、柔道会は消滅してしまうかも…と 小生[畠山]は内心不安に駆られ」たという(畠山発行年不明:7-8)。

「早く近くに道場を と探していたところ、ある時、理工学部に柔道部があり 道場もあるとの話を聞きつけ 早々に道場を訪れた」。「昔の鉄板つくりの みすぼらしいプレハブの掘つ建て小屋で」「正式な規格サイズもない 小さな道場であったが」、そこで「理工学部の学生が練習をしていた」。「練習日を聞くと 週2.3日」で、「そのほかの日は空いているとのこと」だったため、理工学部の柔道同好会の顧問教員に連絡を取つたところ、「幸いに先方教授も 我々の状況を十分にご理解いただき、快く理工学部の練習日以外の 2 日の使用許可をいただくことができた」。「柔道会の固定練習道場が確保」できたこの時が、柔道会の「真の礎」になった、と畠山は回顧している(畠山発行年不明:9-10)。

設立に至った経緯から「熟練者だけの柔道ではなく、初心者にも開放し 勉学に支障のない範囲にて、それぞれのレベルで練習できる場にしたい」というのが「柔道会設立の主要なる趣旨」であった(畠山発行年不明:11)。

1968 年に早大に入学した林政郎は、高校時代に長野県代表としてインターハイに出場経験があり、入学直後に柔道部の練習の見学を行った。しかし、「体育会系って本当に、どの大学でもね、厳しく、「体育会系っていうのは別格」と考えており、「そういう中でやる自信というか、やる気になれなかつた」という。「でも、柔道は好きだから」、「自由に、縛られずにやりたい」と考えて、柔道会に入会したという(インタビューNo.4)。

1968 年に早大に入学した二神光は、「柔道部ってのは専門家っていうか、それこそ日本選手権を目指す人がやっているような世界」だったため、「最初から柔道部に入ろうとか、そういうのは全くな」かったが、「柔道会の勧誘を見て『そういう会があるんだな』と思」い、入会したという(インタビューNo.6)。

柔道会は、理工学部の道場を拠点にして活動が本格化した。理工学部の道場での練習は週に3~4 回行われ、「常時、20 人から 30 人のメンバー」で、インターハイ出場経験のある会員が 4~5 人いたという。普段の練習は、会員のうち「総勢 10 から 15」名くらいが参加し、練習時間は午後「6 時から 9 時という規定」であったが、「みんな三々五々集ま」り、「遅く行っても怒られるわけじゃないし、1 時間ないし 1 時間半やって帰るというかたち」で活動した。「一番最初に来た方は準備体操して、基礎反復練習はしないで」「ある程度体を温めたら打ち込みをやって、乱取り」を行うのが通例であった(インタビューNo.6)。

会員の中には、「同好会に入って初めて柔道しようって来た人」や「柔道自体もあるけど、終わった後、麻雀なんかも楽しみに来る人も」おり(インタビューNo.6), 「ルーズと言えばルーズ、自由と言えば自由」であったが、会員にとっては「そういうところが居心地がいい」と感じるものだったという(インタビューNo.4)。

## 5. 小括

1950 年代から 60 年代にかけて結成された 4 つのスポーツサークルについて見てきた。いずれのサークルでも、そのスポーツをやりたい、続けたいという素朴ではあるが根源的な動機を出発点として、中心的なメンバーが仲間を募り、活動する場所・施設を見つけ、定期的に活動することで、スポーツサークルとしての組織と実態を備えていった。

初期のスポーツサークルの特徴として、運動部との差異化の意識の強さがあげられる。特に重要なのは、運動部に入部すれば練習時間の長さから学業に支障をきたすことや、運動部の非常に厳しい練習や上下関係に対する忌避感である。

「運動部っていうと、要するにプロ」(インタビューNo.1), 「体育会系っていうのは別格」(インタビューNo.4)という言葉にも表れている通り、競技力向上を第一に追求する運動部に対して、自分たちはそこまでの競技レベルにはないことを自覚したり、競技力のあくなき追求を回避したりしつつ、自分たちの競技レベルや人生の目標、生活スタイルに合った形でスポーツをやりたい、続けたいという希望をもつ学生たちが集まって作られたのがスポーツサークルであった。

スポーツサークルは、運動部のように勝利の追求や競技力向上だけを目的とはせず、初心者や素人、「ヘタクソ」でも参加できたため、組織や活動の形態も運動部とは異なるものとなった。先輩・後輩の上下関係は緩やかなものとなり、練習への参加／不参加も個人の自由意思に任せられた。そのため、麻雀や飲み会といったスポーツ以外の要素を重視する会員もいた。

また、各スポーツサークル誕生の経緯を概観したことで見て取れるのは、スポーツ実技の授業が果たした役割の重要性である。稲穂を除く 3 団体において、中心人物がスポーツ実技の授業を受講し、その競技の魅力を(再)発見したり、運動部ではない形で競技を続けたいと思う学生たちのネットワークを作り上げたりするきっかけとなっていた。

1950 年代から 60 年代にかけて、当時の学生たちが自らの競技レベルや価値観、ライフスタイル

ルに合わせたスポーツ活動を始め、それが同時に多発的に次々と発生していくようになったことで、それまで運動部が独占していた大学スポーツが、運動部とスポーツサークルの二重構造へと変化することとなったのである。

#### IV. 早大におけるスポーツサークルの拡大

前章でみたように、1950 年代から 60 年代にかけて、早大では次々とスポーツサークルが設立されていった。図 2 は、1960 年から 79 年までにおける早大学生部が発行していた『学園生活』、およびその後継誌である『学生の手帳』に記載されている「学生の会」「同好会」それぞれのスポーツ団体とその他の団体の数、および全体に占めるスポーツ団体の割合の推移である。

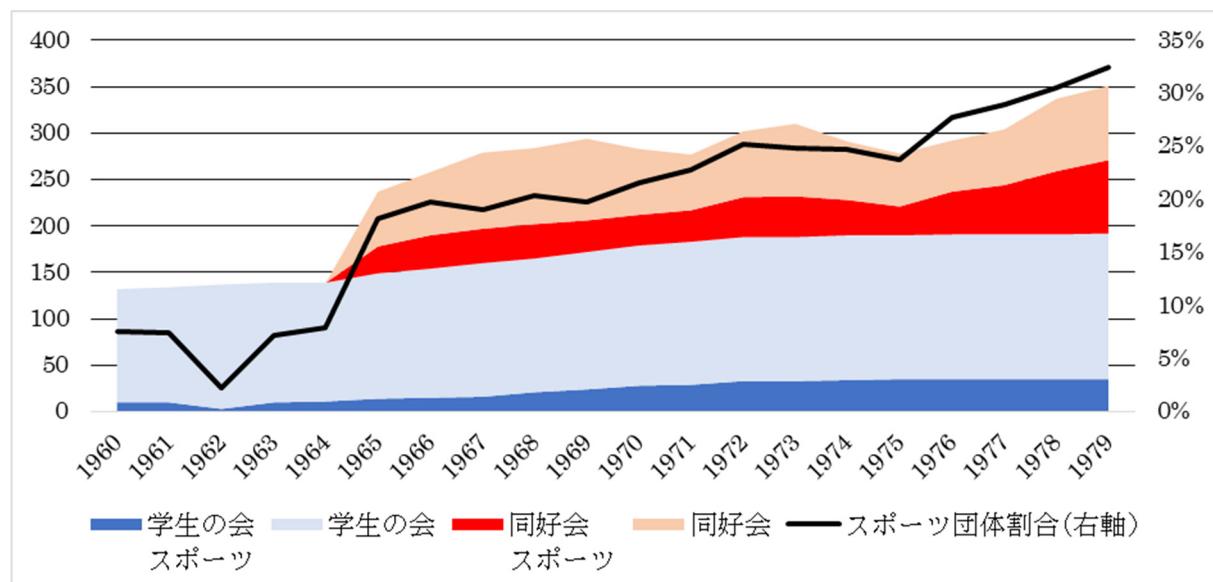


図 2 1960 年から 79 年の早稲田大学学生の会・同好会数とそれに占めるスポーツ団体数と割合

出典：早稲田大学学生部(1960–67)，および，早稲田大学総長室広報課(1968–1979)より作成。

1960 年に「学生の会」として登録されていたのは 132 団体で、そのうちスポーツは 10 団体、7.6% であった。スポーツ団体の主な競技は、舞踏、釣り、音楽舞踊、探検、ラグビー、スキー、拳法、モーターボート、登山、テニスであった(早稲田大学学生部 1960:67–68)。競技スポーツのみならず、釣りや探検等の非競技的な身体活動が多く含まれていることがわかる。一方で、「肉体の鍛錬を通じての人格形成」を活動目的とし、「全日本拳法選手権大会の覇者前田主将の下全員一丸となって激しい練習に精出してい」た日本拳法クラブは、1991 年に運動部に昇格した(早稲田大学学生部 1965:88)。

1965 年から『学園生活』に「同好会」も記載されるようになると、「学生の会」と「同好会」の合計は 237 団体となり、そのうちスポーツ団体が 43 団体、18.1% を占めていた。その後、1960 年代から 70 年代を通じてサークル数全体が増加したが、それに占めるスポーツ団体数の割合も上昇し、1979 年には全サークルの約 3 分の 1, 32.5% をスポーツサークルが占めるようになった。1982 年には、非公認も含む早大のサークル情報が掲載されている雑誌『マイルストーンエクスプレス』が創刊されるが、創刊号に掲載されたサークル数は 1,114 団体で、そのうちスポーツサークルは 374 団体 (33.6%) であった(マイルストーン編集会編 1982)。

表 3 同一競技のサークル数の変化

年	テニス	サッカー	バレーボール	柔道	注釈
1960	1				「学生の会」のみ
1961	1				「学生の会」のみ
1962	1				「学生の会」のみ
1963	1				「学生の会」のみ
1964	1				「学生の会」のみ
1965	1				「学生の会」のみ
1966	1				「学生の会」のみ
1967	4	1	1		「学生の会」「同好会」
1968	4				「学生の会」「同好会」
1969	5	1	1	1	「学生の会」「同好会」
1970	5	2	1	1	「学生の会」「同好会」
1971	6	1	1	1	「学生の会」「同好会」
1972	6	2	1	1	「学生の会」「同好会」
1973	6	2	1	1	「学生の会」「同好会」
1974	4	1	1	1	「学生の会」「同好会」
1975	5	1	1		「学生の会」「同好会」
1976	7	4	1	1	「学生の会」「同好会」
1977	7	5	1		「学生の会」「同好会」
1978	8	5	1	1	「学生の会」「同好会」
1979	11	8	1	1	「学生の会」「同好会」
1980	14	5	1	1	「学生の会」「同好会」
1981	15	5	1	1	「学生の会」「同好会」
1982	50	16	2	2	非公認サークルも含む
1983	57	16	3	2	非公認サークルも含む
1984	60	6	2	2	非公認サークルも含む
1985	89	10	2	2	非公認サークルも含む

出典: 出典: 早稲田大学学生部(1960–67), 早稲田大学総長室広報課(1968–1981), およびマイルストーン編集会編(1982–1985), より筆者作成. 各競技で最初の登録団体となっているのは, WTC, 稲穂, VB 同好会, 柔道会である.

こうしたサークル・スポーツサークルの団体数の増加に伴って, 同じ競技を行う団体数も増加していった. 表 3 は, 本稿でインタビュー調査を行ったテニス・サッカー・バレーボール・柔道 4 競技のサークル数の推移を示したものである. これを見ると, スポーツサークルが誕生し始めた 1960 年代は, 各競技 1 団体ずつであったが<sup>8</sup>, 1960 年代後

半以降, テニスとサッカーが複数団体となり, 1980 年代には 4 競技すべてで複数の団体が存在するようになっていた. なかでもテニスは団体数の増加が著しく, 1981 年に大学公認団体だけで 15 団体あり, 1985 年には非公認団体も含めると 89 団体も存在していた.

表 4 1983 年の早大生の課外活動への参加率

(%)	参加している	参加していたがやめた	参加したことがない
男子	73.7	16.4	9.9
女子	70.7	17.3	9.5

出典: 早稲田大学(1983:74)より筆者作成.

表 4 は、1983 年に早大が学生の課外活動への参加状況を調査した結果であるが、これを見ると、男女問わず、7 割以上の学生が課外活動に参加していることがわかる。部活・サークル等の課外活動に参加したことがない学生は、男女いずれも 1 割未満であることから、1980 年代には、大学生がスポーツをはじめとしたサークルに参加することが、一般的になっていたことがわかる。

本章では、サークル・スポーツサークルが増加して一般的なものとなっていました 1960 年代後半から 80 年代における、スポーツサークルの活動や組織の実態、および当事者の意識について、インタビュイーの証言や史料から見ていくことにしよう。

### 1.WTC

1956 年に創設された WTC は、活動が軌道に乗って会員数が拡大していくなかで、全国大会レベルの競技力をもつ会員も擁するようになっていた。1968 年に早稲田大学高等学院から早大に入学した立原健夫は、高校時代にもテニス部員として活動し、3 年時にはダブルスで東京都大会ベスト 4 の成績を残した。立原は、早大入学後の 2 年間は庭球部に所属し、シングルス・ダブルスそれぞれで関東学生大会に出場した経験もあった。庭球部時代は、毎日朝 9 時から午後 5 時ごろまで「義務練習」があり、「授業へは、練習を抜けて行」っていた。しかし、「昔のいわゆる封建的な体質」が合わなかったことや「我慢してやっても、それだけの成果が今後見込まれるか」という疑問、さらに「他の時間が欲しかった」といった理由から庭球部を退部し、7 歳年上の兄が会員だった WTC に入会した(インタビュー No.5)。

立原が感じた庭球部と WTC の違いは、庭球部は試合での勝利という「目標が一つ」なのに対

して、WTC は「好きな時にできる」、「ほかのこと也可以する」、「種々雑多な人間がいる」ということだった(インタビュー No.5)。

このころの WTC は、深大寺(調布市)と東京海上の富士見台(練馬区)のコートの 2 か所で活動をしていた。約 200 名もの会員を抱えていたため、活動は月曜日から土曜日までほぼ毎日、午前 9 時から午後 5 時まで行われていた。会員は、授業をはじめとした個人のスケジュールに応じて参加可能な曜日・時間を選択して活動しており、中にはほぼ毎日練習に参加する会員もいた。練習への参加／不参加は各自の自由に任せていたが、それでも當時 40~50 人くらいの会員が活動をしていたという。夏季合宿は「軽井沢と菅平とか」「2 回に分けてやってい」たという(インタビュー No.5)。

1970 年には関東大学硬式テニス同好会連絡協議会が創設され、第 1 回関東大学テニス同好会春季大会が開催された。大会は、4 月 21 日から 8 日間の日程で行われ、男子シングルス 192 名、男子ダブルス 117 組、女子シングルス 22 名、女子ダブルス 19 組が大学の枠を超えて参加した(筆者不明 1970)。この第 1 回大会の男子シングルスで優勝したのは、WTC の立原であった(インタビュー No.5)。

1977 年に早大に入学した大平由美は、小学校から高校まで本格的なスポーツ経験はなかったが、「受験勉強から解放され、女子高から解放され、とにかくキラキラしたものをやりたいと思って」WTC に入会した。大学入学以前にテニスのプレー経験はなかったが、1970 年代に「スマッシュをきめろ!」「エースをねらえ!」等のテニス漫画が流行し、小学生のときからそれらを読んでいた大平にとって「テニスは優雅というか、やりたいスポーツ」で「テニスに憧れてい」たという(インタビュー No.8)。

当時、早大には複数のテニスサークルが存在していたが、「チャラチャラ系のサークル」、「遊んでいる感じというか、女の子を捕まえるためのテニス、っていう勧誘の仕方がミエミエなサークルはちょっと敬遠」していた。しかし、WTC は大規模サークルのため「新入生も多かったし、女性も割と説明会にいっぱい来て」おり、「みんなと友達になれる」という感覚や、「WTC は人数が多くて歴史が古くて、唯一大学から認められている[テニス]サークルなんだ」と説明されて「安心」したことが入会の決め手だったという（インタビューNo.8）。

大平の友人たちも、「テニスをやっていたので辞めたくないはなし、サークルだったら自由に時間を使えるから、ということで入ってくる人」や、「初心者の人は」「人数が少ないところよりも多いところのほうが友達もいっぱいできるし、コートも週 6 日あったのでテニスできるチャンスも多いかな」ということが理由で入会したようだ。新入生の会員の中には「入っても 1 回も来ないで辞めちゃった子も少しある」、「ちょっと来たけどやっぱ辞めたり、会費が払えなくて辞めたりとか、辞める人はいた」が、「外で運動したいとか、勉強以外のことしたいとか、仲間を作りたい」などがサークル活動を続ける理由だったようだ（インタビューNo.8）。

1970 年代に、WTC の活動はより組織化されていった。それを示すのが、「統制練習」と呼ばれる組織的な練習の導入であった。WTC の活動は、午前は「フリー練習」と呼ばれ、「9 時からお昼 1 時までが、出たり入ったりするのが自由」であったが、午後は「1 時から 3 時が前半の統制練習、3 時半から 5 時半が後半の統制練習」であった。統制練習は、曜日ごとに決められた「曜日マネージャー」を中心に運営され、マネージャーが決めた練習メニューを参加者全員が行い、その時間は途中参加・退出が認められなかった（インタビューNo.8）。

また、対外試合に出場する会員を決めるために「部内ランク制度」も導入された。ランク制度は、男子／女子、シングルス／ダブルス各部門について、強さを上位から順位付けしたもので、ランク上位者（ランカー）は「ランクを基に出場メンバー

が選ばれる対抗戦」に出場できた。ランク表は、サークルメンバーの「溜まり場的な喫茶店」に常時掲示されており、会員はいつでも誰がランカーかを知ることができた。「ランク外の人はランカーに挑戦を申し込」むことができ、ランカーは試合に敗れるとランク外となり、勝った選手／ペアがランカーとなった（インタビューNo.8）。

「部内ランク制度」の導入に至った詳細な経緯および時期は不明であるが、この制度が導入されたことにより、WTC ではサークル内における会員の公平性を尊重しつつ、対外試合での勝利を目的にした競技力の高い選手／ペアを選出することが可能となったのである。

さらに、サークル全体を統括する「チーフマネージャー」という役職を、会員の選挙で決めるようになっていた。チーフマネージャーは立候補制で、立候補者は全会員の前で「選挙演説」を行い、サークルの会員から選出された選挙管理委員会が運営する選挙によって決められた。1975 年に早大に入学し、チーフマネージャーを務めた経験をもつ北川隆雄は、立候補した動機を次のように語っている。

彼〔チーフマネージャー選挙での北川の対立候補〕は、「会費を払ってない奴は全部辞めさせちゃう」とか、「練習が一番なんだ」とかそういうラディカルな〔主張をする〕やつがいたんです。私はユルいところが[WTCの]すごく良いところだと思っていて、「来なくても会費を払っていればそれでいいじゃないか」と僕は思ってたんです。けど、「そこをもうちょっとガチっとやる」というのが彼の主張で、「こりゃいかんっ！」と思って（笑）（インタビューNo.8）

サークルの運営ルールを厳格化したり、練習を強化したりすることを主張する対立候補に対し、「ユルいところ」を残そうと思ったことが、北川が立候補した動機であった。

北川が選挙で当選し、「チーフになって初めての合宿」では、これまでトーナメント方式で行われていた試合を「チーム制」に変更した。その理由は、トーナメント制では「初心者は当然すぐ負けてしまい、試合が「1 回で終わり」「あとはずっと応援することになってプラプラしている[人がいる]の」

を見て「これはいかんな」と思ったからだった。チーム制に変更し「みんなでやると[チーム内は]平等に試合が出来る」ようにして、「初心者でありうまくないメンバーがトーナメントで直ぐに負けてその後は応援ばかりといったこと」がないようにしたという(インタビューNo.8)。

チーフマネージャーや曜日マネージャーは、数百人の会員を抱える WTC の運営の中心的な役割を担うため、それに就くには「相当[な]覚悟」が必要だった。「マネージャーは朝早く出て[コートの]鍵[を]開け」たり、練習の「前からプランを考え」たりするという生活を 1 年間続けるため、「最後はね、やっぱり達成感があ」り、「私[北川]は最後泣いちゃいましたけど、みんなそうだった」という(インタビューNo.8)。

WTC の実践として特徴的のは、サークル活動への参加における自由と規律の両立によって、会員それぞれがもつスポーツ志向の多様性を保障している点である。午前に自由練習、午後に統制練習という異なる形態の練習を実施し、さらに参加／不参加も自由であったために、ほとんど毎日参加する会員から、週 1 回 2 時間程度の会員まで、各自が自らのスポーツ志向やスケジュールに基づいて、活動の頻度や強度を決定することができた。

また、それを可能にしていたのが継続的に利用できる施設の存在と、数百人という会員数がもたらすスケールメリットであったと思われる。数百人の会員がいるからこそ、個々の会員は当日の気分や予定で参加／不参加を決めて、サークル全体としては大きな支障をきたすことなく活動できた。競技レベルが高い会員も初心者も、各自のレベルに適した相手とプレーをすることが可能であった。

また、ランク制度と演説会といった情報の公開性と、ランクに基づくメンバー選出や選挙に基づいた民主的な組織運営といった公平性も重要である。こうした公開性と公平性に基づいて運営がなされたことにより、数百人の会員を抱える大規模サークルでありながら、競技力の向上と会員の平等性・多様性が尊重された活動が可能になったものと思われる。

## 2. 稲穂

1965 年に結成された新関東フットボールリーグで、初代王者となった稻穂は、その後も上位の成績を残し続け、サッカーサークルとして一目置かれる存在になっていた。1976 年に早大に入学した高橋義彦が稻穂に入会したきっかけは、浪人中に目にした『朝日新聞』の特集記事だった。「そこ[記事]に、早稲田大学稻穂キッカーズっていう名前があって」興味をもち、「早稲田に入った先輩に『稻穂キッカーズどんなんですか』ったら、『強い』と。『今、一番強いじゃないか』って言われてたんで、入るなら稻穂かなっていうのは、入学する前からイメージは持ってい」たという(インタビューNo.9)<sup>9</sup>。

1970 年代半ばの稻穂の新入部員は、1 学年約 30 人で「大学行ってまでね、体育会ってのはいやだって。楽しんでサッカーやりたい」と思っていたり、「体育会[ア式蹴球部]から落っこってきたやつも」いたりしたが、その中には後に日本代表選手・監督となる岡田武史も名を連ねていた。岡田は、日本サッカー協会幹部から説得されて 2 ヶ月ほどで稻穂を退会し、「ア式に上がっていった」が、高橋と岡田は学部が同じこともあって、二人の友人関係は卒業まで続いたという(インタビューNo.9)。

1970 年代の稻穂の活動は週 4~5 日、1 日 2 ~4 時間程度で、主な活動場所は小石川サッカ一場と全面芝生の千代田生命グラウンドで、練習参加者は 50 人前後だった。練習は「基礎練から始まってランニングしたり」したが、「試合形式が多かった」。日によっては「最初から紅白戦、ずっと最後まで」ということもあれば、「学年別、それからリーグ戦が近くなったりすると、一軍で出る人たちと、そうじゃない B チーム」で試合を行ったり、「おちやらけの時は番号順。全部シャッフルして 1, 2, 3, 4, 1, 2, 3, 4」など、サークル内で多種多様な編成で試合をしていた(インタビューNo.9)。

稻穂には「東京都の選抜候補だったとか、何何県の選抜候補」だった会員があり、「都立の弱い高校」出身の高橋にとっては「やっぱりレベルが高かった」と感じるものであった。そのため高

橋は「自分で努力せんとついていけないなって思い」、「高校[高橋の母校に]いって練習」することもあったという(インタビューNo.9).

このような努力を続けた高橋が、稻穂での一番の思い出と語るのは、3年時に新関東フットボールリーグで優勝したことであった。

これはもう、最終戦、当時、忘れもしない1978年11月23日ですよ。リーグ戦8チームあるんですよね、ってことは7試合やるわけで。我々がそのときは5勝1敗だったですね。相手の日大生産校ってのが5勝1分だけで、我々は勝たないと優勝できなかった。(中略)前の日に飲みに行つて誰もプレッシャーで、あんだけ酒飲むやつが酒もほとんど飲めなく、一言も話せない。「何か話せよ」という感じで、1時間ぐらい経つて「かえろっか」って[言って帰った]。それで試合が終わって、よし今日は飲むぞーってプレッシャーから解放されたんですけど、それがもとに戻らない。酒が飲めない、優勝しても。いや、飲めるんですけど酔いが早かったですね。最大の思い出はそれですかね。(インタビューNo.9)

新関東フットボールリーグは、サークルでサッカーをする会員たちには大きな目標であり、会員たちはその試合に勝利をしたり、優勝したりすることを目指して努力を続けていた。そのため、優勝をかけた大一番を前にして強いプレッシャーを感じていたのであった。

大学サッカーサークルの強豪として知られ、競技レベルの高い会員が日常的に努力する環境にあった稻穂は、「1年にいつぺん」くらいの頻度でア式蹴球部と試合をしたり、当時高校2年生だった都並敏史と戸塚哲也(のちのサッカー日本代表選手)がいた読売クラブ(現・東京ヴェルディ1969)ユースと対戦したりしたこともあったという(インタビューNo.9)。

こうしたなかで高橋は、対外試合の出場メンバーを決めるために「出席状況のチェック」を導入した。のちにこの制度は「出率」と呼ばれ、対外試合に出場するメンバーを選出する一つの基準となった。「我々は体育会ではない、大学を代表しているわけじゃないけども、気持ちだけは一緒」とい

うと雰囲気が稻穂にはあり、「やっぱり、練習出るのはあたりまえだよなっていう発想」から出率は導入され、最初は「出席のいいやつから好きな[背番号[を]とついく]ことから始まったようだ(インタビューNo.9)。

稻穂で「出率」が導入され、定着していった背景には、対外試合に出場するメンバーの選出に当たって、公開性・公平性のある基準を必要としていたことがあるように思われる。稻穂は、競技力の高いスポーツサークルで、対外試合での勝利を重視していたため、試合には競技力の高い選手を選ぶ必要があった。しかし、強豪とはいえ監督やコーチといった指導者はおらず、メンバーの選出は会員たちが自ら行わなければならなかった。

他方、実力に基づいたメンバーの選出は恣意的・主観的になりやすく、なかには試合に出場するメンバーに不満を持つ会員がいたことも想像される。競技志向、実力重視ではあるが指導者がいない稻穂だからこそ、対外試合に出場するメンバーから外れた会員たちも納得できる客観的な基準が求められたのであり、それが出率を導入するきっかけだったようと思われる。出率は、会員間の平等性と競技力重視という相反する方向性をもった稻穂という組織を機能させるために必要だったのであり、それゆえに、導入されてから現在まで定着しているように思われる。

### 3.VB 同好会

上述したように 1980 年代には、早大のスポーツサークルが非常に多くなり、同一競技でも複数のサークルが存在するようになっていた。その結果、各スポーツサークルは他のサークルとは異なる特徴や方針を打ち出し、同一競技内でもサークルごとに差異化が図られるようになっていった。

1981 年に早大に入学した舛田和明は、高校時代にバレーボールを経験し、入学時に「もうバレーボールはなあ」と思っており、テニスやスキーのサークルに「友達に誘われたりして、何回かちょっと行つたりしてみた」という。しかし、「どうもしつくりこない」と感じ、「どうせやるならちゃんとやりたい」と思い、「バレーボール同好会は学生の会で人

数も多く、「上級者はインターハイに出た奴とか、インターハイ・国体選手[も]いましたし、関東大会とかっていうのもざらで、「私みたいなそこそこの経験者と、まったく大学から始めるような者と、ほんと千差万別いろんな人たちがいたんで」、「これならやっぱり良いんじゃないかなって思」い、VB 同好会への入会を決めたという(インタビュー No.12).

1983 年に早大に入学した SH が入会したときの VB 同好会は、「リクリエーション的なバレーでは物足りない、でも体育会の部活動では練習に時間がとられ、しかも大学で 1 チームなので試合に出られるかわからない」ということで、同好会で真剣に楽しくバレーしましようというような雰囲気だったという。早大入学までバレーの経験がなかった SH は、「試合が近くなると」「練習の後とか、〔練習日とは〕別の平日とかに練習を」したり、「先輩とか有志が集まって初心者の人を教えてくれたりとかいうような、技術指導みたいなのもやつてもらったり」して、「パスの仕方レシーブの仕方」などを教えてもらったという(インタビュー No.15).

1980 年代の VB 同好会の会員は、1 学年で「20 人前後は毎年」おり、会員の総数は 80 名から 100 名以上にもなっていたという(インタビュー No.12, 15). 3 年生が担当する幹部の役職も多様化と専門化が進み、幹事長、副幹事長、マネージャー、会計、女子コーチ、技術コーチといった「役職をみんなで分担して」サークルを運営した。「4 年生はもう引退っていうか自由参加」であったが、「4 年生は 4 年生だけでチームを作って、1 年から 3 年で 6 チーム 5 チームぐらい作って」「大会に出て」いたという(インタビュー No.12).

学生の会は、毎年総会を開催することが「学生の会に関する規程」で定められており、VB 同好会は毎年 3 月の合宿中に総会を開催していた。幹部は、総会で 1 年間の具体的な活動方針を発表し、会員や先輩からの「駄目出し」に応えなければならなかった。VB 同好会は、「バレーについて会員相互の親睦を図るために会員のバレーの技術の向上を図ることを目的とする」とと「会員間にバレー技術の格差が存することをよく認識し、これに配慮しなければならない」

という 2 つの方針を掲げていたが、「どうやって私たちの代は具現化していくか」という具体的な内容を、幹部が提案しなければならなかつた(インタビュー No.12).

幹部の提案に対して「『より良い成績を得る』っていうのはどういうことなんだ」、「あくまで、関東のバレー同好会リーグの優勝を目指すためのね、強い最強チームを作つて臨むのか」。あるいは、「なるべくみんなが同じように戦える、あまりチームに極端に強さに差をつけない」、「『全会員が満足できる活動』、その『満足』っていうのはどういうことなのか」といった意見や質問が会員から出され、「喧々諤々な話し合い」が行われた(インタビュー No.12).

そのため、幹部にとって「総会対策がすごい重要で」、「活動方針をどうするか。この活動方針についてどういうふうに説明していくか、誰が担当するかとか。相当これは戦略的に考え」なければならなかつた。それでも「通称『総会屋』と呼ばれている先輩たちが何人かいて、その先輩たちからぼこぼこにやられた」という。「活動方針はたった 1 枚の紙切れだけど」「作るのは苦労した」ことが舛田には思い出として残っているという(インタビュー No.12).

1980 年代には、「もともとは早稲田と慶應、明治とかで始まった」関東大学バレー同好会連盟(同好会リーグ)が結成され、バレー同好会サークルのリーグ戦が開催されるようになっていた。大会には、一大学から複数サークルが参加することや、一サークルから複数チームが参加することも可能で、VB 同好会は「上[上手な会員]から ABCD って強い順に[チームを]作つて」参加していたという(インタビュー No.12).

1980 年代中ごろには女子の同好会リーグも開催され、「女子の参加校は」「早大、慶應、明治、日大、専修、筑波、京浜女子[現・鎌倉女子大学]、学習院短大、日女体、國士館、埼玉、等々、私立はほぼ男子と同じ大学が」参加し、「早大女子は現役 3 チーム、たまに 4 年チームが参加してい」た。女子の会員が増加し、「女子は女子で、女子[チーム]の結成式」を行うようになり、「女子だけなので盛り上がって、普段男子と飲ん

でるときと違う雰囲気で、面白かった」という(インタビューNo.15).

この同好会リーグで好成績を残すことは、VB 同好会の会員の目標ではあった。しかし一方で、同好会リーグはすべての会員が競技レベルに関わらず試合に出場することができる機会でもあった。その二面性について舛田は次のように述べている。

それなりに上級者もいましたから、大会は、上のチームは結構良い成績を残していて、僕が 1 年の時の 4 年生は優勝したことがあるんですよね、同好会リーグで。それから、1 つ上の代の人たちは 3 位だったかな。すごくレベルの高いこともやれたし、それから初めてやった人たちもいるんだけど、そういう人たちが同じコートで同じバレーをやってるっていうのは、やっぱ高校とかじゃ考えられないで、その初めてバレーやった人たちがね、試合に出てスパイクを決めるとかね、何かこう良いプレーができたりすると、いやこれはちょっとすごいなってみんなで応援したのを覚えてますし、そういうのが分け隔てがない。同好会だからできるっていうのが、体育会じゃ絶対味わえないと思うんだよね。体育会だと 1 チームしか出ないわけじゃないですか、試合は。そうじゃなかったのが、やっぱりこの同好会が良いところだなって。(インタビューNo.12)

「高校までは、とにかく上〔技術レベルの高い人〕から順番に試合に出ていくっていう感じ」の環境でバレーボールをしてきた舛田は、「初めてやった人たちも満足できるような運営をするにはどうすりやいいかっていうのは相当考えた」という(インタビューNo.12)。VB 同好会は「勝つことを追求しながらも、一方で熟練者から初心者までの大所帯の会員に出来るだけ均等に機会を与える」という悩みは、体育会では決して経験できないものであり、それが舛田や他の会員も感じる VB 同好会の魅力だったという(早大バレーボール同好会創立 50 周年記念誌編集委員会編 2014:8)。

技術レベルの異なる会員が集まりながらも、「絶対エースが 2 人いて、そこに集中させ」る「大エース中心のバレー」、「バレーコートを 9 つに分けて、それでゾーンでしっかりとね、サインを決め」る「緻密なバレー」等、異なる「理想のバレー」を

追い求めて、「チーム編成〔を〕どうするかっていうのは相当揉め」、「真剣に話し合」いながら活動を行った。そのため、舛田には「サークルなんだけど、あまり自分たちをサークルとは思ってなくて、かなり真剣にバレーには取り組んだなっていう気持ち」があったという(インタビューNo.12)。

スポーツに真剣に取り組むという VB 同好会会員の姿勢や意識は、一方で「ちゃらちやらした感じ」への違和感や「ミーハー」なサークルへの拒否感を表明することにもつながった。舛田は「きついことよりは楽しいこと」を重視するサークルには「やっぱちょっと違うなって思」っており、VB 同好会は「ミーハーな感じじゃなくて、これはちゃんとやろうと思ってるんだぞっていうところを出す表現として、『ミーハー禁止』なんていうのがね、出てきたんでしょうね」と述べている(インタビューNo.12)。

VB 同好会同様、スポーツサークルのなかには、紹介文で「ミーハー禁止」「ミーハーお断り」を明記する団体が現れるようになっていた。これは、スポーツサークルの増加に伴って、同一競技でも複数のサークルが存在し、団体ごとに活動の内容や方針が多様化していく中で、各団体が自らの特徴を打ち出す差異化の戦略だったように思われる。

こうした差異化の戦略としての「ミーハー禁止」は、当時のスポーツサークルの動向を示す新しい現象として、「早稲田スポーツ」でも特集記事が組まれていた。

これらの〔オールラウンド〕サークルには体育局〔現・早稲田大学競技スポーツセンター体育各部〕やその他の本格的スポーツ同好会の厳しさを避けて、「自由」を求めて結成されたものが多い。ほとんどが部員数 50 名を超える大所帯で男女の比は半々ぐらい。女子はほとんど他大学から“輸入”しており、中には早大の女子を入部させないところもある」(中略)

「スポーツの後の“楽しみ”が目的じゃないの」「あんなヘラヘラして連中は早大生として恥ずかしいネ<sup>マダ</sup>」などと彼らに対する世間の眼は冷たいようだ。

実際にその活動ぶりをみてみると、これらの先入観がいかに偏見に満ち満ちているかわかる。彼らの大半は、実に真剣にスポーツ<sup>マダ</sup>と取り組んでいるのだ。

例えばガッツスポーツクラブ。週に 2・3 回、バレーボール、バスケット、野球に取り組むほか、かなりきつい合宿を毎年春に行っている。その内容は、前出の 3 種目を延べ 50 時間にわたって練習するというものである。しかも野球などは 100 本ノックをやり最後にビシッときまるまで終わらせないというハードさ。とてもギャルハントの片手間に…というわけにはいかない。<sup>10</sup>(早稲田スポーツ新聞会 1990:714)

1950 年代から 60 年代にかけて、スポーツサークルが結成された当初、スポーツサークルの学生たちは運動部との違いを強調するために、自由や楽しさを強調していた。しかし、1970 年代以降、同一競技で複数のスポーツサークルが存在したり、他大学の女子学生の参加を「ウリ」にするサークルが生まれたりする中で、サークルの中には「ちゃんとしている」「ちやらちらしていない」ことを強調する団体も存在するようになっていったのである。

#### 4.柔道会

1978 年に早大に入学した関義久は、高校まで専門的なスポーツ経験はなかったが、浪人中に「今までの自分の生き方を少し変えてみようと思い」、「週 1 回だけ、町の道場に」通つて「柔道を教えてもら」うようになった。そのうち「早稲田大学に入れたら、その柔道をやりたいと思った」が、「自分が柔道部に入って 4 年間できるかどうか自分で考えたときに、自信が」なかつたため「何かそういう同好会的なものがないか探し」、『学生の手帳』やポスターで柔道会の存在を知った。早大入学後、「恐る恐る[柔道会に]行ってみた」ところ、「感じがよかつたので、何とか教えてもらいながらやってこうと思った」という(インタビューNo.10)。

1985 年に早大に入学した関根弘和は、「第一線で勝利を目指してやっていくというのは私についていけないだろう」と考え、「ちょっとはやつことがある柔道がいいかなと思って」柔道会に入会した。入会のきっかけはサークル紹介雑誌『マイリストーン』で柔道会の記事を見つけたことだったという(インタビューNo.16)。

1970 年代後半から 80 年代の柔道会は、ひきつづき理工学部の柔道場で練習していた。「基本的には授業の期間の月水金、夜の 7 時から 9 時

までの 2 時間ということでやって」おり、「春休み夏休み冬休みなどの授業休止中はこの練習も中止、休止」だった(インタビューNo.16)。

会員は全部で「20 人から 25 人ぐらい」いたが、練習の参加者は「だいたいいつも 8 人、6 人から 10 人ぐらい」で、「試合のときしか出てこない人も」いた。会員の中には「横浜市で優勝したりとか、東京でベスト 16 に入ったりとか、神奈川県の方は、神奈川県で山下[泰裕]に負けて 3 位になっ」た人、「北陸 3 県のチャンピオン」などの実力者もいたが、練習量が少ないため「だんだん弱くなつ」つていったという(インタビューNo.10)。

普段の練習では、「最初に礼をして、それから柔軟体操をし」、「それから乱取りをして、それから寝技をして、そつから整理体操して、円陣組んで今日の反省を一言みたいなのをやって、それで終了と、そういう感じ」だった。高校までに高いレベルでの競技経験がある会員にとっては、「これは柔道の練習じゃないっていうくらい軽い練習だった」ようだが、初心者の関には「それでよかつた」という。関は、「体のトレーニングも腕立て伏せとか懸垂とかそういうのを自分で日課にし」て、「毎日必ず 20 回、最低 20 回は 365 日 4 年間全部」やつた結果「それなりに筋肉もついたりして、体も鍛えられた」という(インタビューNo.10)。

関は、講道館で行われる特修科という短期の講習にも通つたことで、「あるときから[技が]掛かりだす」ようになり、「これでいいけるんだ」と感じ、「試合でも[技が]できるようなとか、そういう経験もした」という(インタビューNo.10)。

「大学では素人同然で入」った関根も、上級生に「受け身から教わつて」いたが、「立ち技は人によって教えることが違つて」いたため「自分で考えて取捨選択し」なければならなかつた。一層の上達を目指した関根は、「大学 2 年生になってから」地元の道場にも「通い始め」た(インタビューNo.16)。また、先輩の薦めで岡野功の著書『バイタル柔道 寝技編』を入手して「見た技を試しながら覚えて」いき、昇段審査では「寝技ばかりで 4 勝し、初段を取得」したという(関根 2015)。

柔道会の対外試合は「もともと早慶戦からスタート」した「5 大学戦」という同好会リーグがあり、

加盟校は「早稲田, 慶應, 明治, 中央, 法政」で春と秋に大会を開催していた。理工柔道部との対抗戦や上智の柔道部とも練習試合を行い、対抗戦は AB2 つのチームを作つて出場していたという(インタビューNo.10)。

柔道会の合宿は4泊5日で行われており、午前・午後それぞれ約2時間の練習を行つた。練習メニューは「思い付きで」「上級生がいろいろ補強運動、アヒル歩きなど[を]やらせ」、「初日から階段を立つて歩けなくなり、「四つん這いになつて[階段を]上がって」いくようなこともあつた。筋トレは「普段はそれほどはやって」おらず、「練習の最後に腕立て伏せとスクワットをやる程度」だったが、合宿では「腕立て腹筋スクワット、それからブリッジ」などを行つた。普段は「とびとびでしか[練習を]やっていなかつたため、[合宿で]続けてやると疲れがたまつてきてきつかった」という(インタビューNo.16)。

柔道会の会員は、大学から柔道を本格的に始めて、練習に熱心に取り組む会員がいる一方で、「柔道会がすべてじゃなかつた」会員も一定数いたといふ。「ベースは柔道会」であつても「漫画研究会に入つたり」、「アルバイトが中心」の会員もいるなど、「みんないろんなことをやってた」ようだ(インタビューNo.10)。なかには「柔道をはじめにやるというよりも、大学の勉強をしっかりやりたい」ということで「在学中に司法試験に受かつた」り、「電通の広告論文」で「第1位文部大臣賞をとつ」たりした会員もいたといふ(インタビューNo.16)。

関根は当時のことを振り返つて、先輩から「どの授業が面白いなとか」「こういう本を読んでみろとか」、「いろいろ政治の話なども聞いて、それに付き合ってくれたり」してもらい、「他の学部の話などを聞くことができてですね、単に柔道だけじゃなくて、耳学問をいろいろと知ることができた」と述べている(インタビューNo.16)。

柔道会には、「来る者拒まず、去る者追わず」の雰囲気があり、試合中に「ポイントゲッターの先輩が」「『女[彼女]とコタツを買うんで、帰る』って言って」試合中に「帰っちゃつた」が、「ガールフレンド[を]連れてきた」「普段練習しない先輩」が「『俺が出る』って言って」試合に出場したこともある。

ったという(インタビューNo.10)。対抗戦やリーグ戦といった対外試合であつても、それらを重視しない会員もあり、会員各々が自らの都合や志向に応じて自由な活動を行つていたことが伺える。スポーツサークルの自由は、競技、規模、活動方針において多様な団体が存在するだけでなく、同じ団体内でもスポーツとの多様な付き合い方が許容される点にもあったと言えよう。

## 5.小括

本章では、1960年代後半から80年代半ばまでの早大のスポーツサークルの活動を見てきた。サークル創立から10年以上の時間が経過して活動が安定するとともに、各団体の方針や会員の志向に基づいて、組織的かつ多様なスポーツ実践が行わされたことがわかる。

WTCは、チーフマネージャーや曜日マネージャーを中心に運営され、数百人の会員を擁しながら、会員それぞれが自由に練習の内容や頻度を選択することができた。チーフマネージャー選挙や部内ランク制度によって、会の運営や対外試合のための選手の選抜を民主的で透明性のある方法で行つようになつてゐた。

稻穂は、新関東フットボールリーグでの優勝を目指し、競技能力の高い多くの会員を集めた。稻穂は、対外試合に出場するメンバーを選出する方法として採用したのが「出率」であった。それにより、監督やコーチといった指導者がいなくとも、客観的な基準に基づいて対外試合に出場するメンバーを選出することが可能となつた。

VB 同好会は、初心者から全国大会出場経験者まで、会員間での競技レベルには幅があつたが、こうした様々な競技レベル会員たちが、チームごとに自分たちのプレースタイルを模索したり、総会の場で侃侃諤諤の議論を行つたりしながら、活動の方針や内容が決められていつた。

柔道会も、初心者から全国大会出場経験者まで、会員の間には大きな競技レベル、競技経験の違いがあつた。さらに、練習や試合への取り組む姿勢にも会員間で大きな差があつたが、それは他方で柔道を共通点とした学生たちに、柔道以外の様々な活動や将来に向けた準備に取り

組むことも可能とした。

スポーツサークルの活動の特徴は、運動部のように競技力の向上や試合での勝利を第一義に追求するのではなく、勉強との両立、参加／不参加の自由、初心者歓迎、将来への準備等といった価値観やライフスタイルとスポーツの両立を許容する点にある。そして、その許容する項目や自由の度合いの違いに基づいて、多くのサークルが創設され、それぞれの団体で多様な実践が行われていったのである。

## V. 高度成長期における大学スポーツの構造的变化とその背景

### 1. 大学スポーツサークルの拡大とその社会的背景

これまで見てきたように、1950 年代後半以降、早大では運動部に所属していない一般学生が自主的に組織したスポーツサークルが次々と誕生し、多種多様な実践を展開するようになっていった。その結果、従来は運動部だけで構成されていた大学スポーツの世界が、運動部とスポーツサークルからなる二重構造へと変化した。

大学スポーツサークルの誕生・拡大は、早大だけにとどまるものではなかった。例えば、1967 年の中央大学には 20 のスポーツサークルが存在しており、八島(1968)の調査ではそのうちの 15 団体に合計 900 名の会員がいた。井之上ら(1972)が近畿地方で行った調査では、14 大学に 53 団体が存在し、合計 603 名の会員がいた。1978 年の慶應義塾大学には、129 団体 6,916 名の会員がいた(兵藤 1979)。立命館大学では、1966 年に勤労学生 50 名によって「二部スポーツサークル」も創設された(「二部スポーツサークル二十年の歩み」編集委員会編 1986:14)。

八島(1968)によると、調査対象となった 15 団体中 8 団体が、活動の目的を「会員相互の親睦」と回答した。調査回答者 464 名中 174 名(37.7%)が入会の動機を「その種目がやりたかったため」と回答、「公認の部に入るのが嫌で」と回答した者も 67 名(14.4%)を占めていた。1970 年の毎日新聞には、高校時代に甲子園に出場経験のある学生が、「“野球バカ”になりたくなかつた」、「大学

生になってまでしごかれるのはまつ平」とスポーツサークルに加入した記事も掲載されている(毎日新聞社 1970)<sup>11</sup>。

1967 年に行われた日本私立大学連盟の調査によると、「なんらかの課外活動に属しているもの」が約 70%, 「在学中にすくなくとも一回は、そういった団体に加わり、活動をするもの」が約 15% いたことから、1960 年代後半には多くの大学生が、何らかの部活・サークルに参加するようになっていた。さらに、同じ調査において「大学生の趣味・娯楽」に対する回答として、「団体のスポーツ(野球、テニス、バレーなど)」339 名(6.6%), 「ボーリング、スキー、スケート」276 名(5.4%), 「個人的なスポーツ(水泳、ゴルフ、釣りなど)」229 名(4.5%), 「山登り、ハイキングなど」191 名(3.7%)を占めるところから、当時の大学生にとって趣味・娯楽としてスポーツをすることが広まり、その一つの方法がスポーツサークルだったと言えよう(土橋 1969:88-103)。1960 年代から 80 年代にかけて、早大を含む多くの大学において、学生がサークル活動に参加することや、趣味・娯楽としてスポーツを行うことが一般的になっていたのである。

高度成長期に、大学でスポーツをはじめとしたサークルが拡大した背景には、高度経済成長や、それに伴う大学進学率の上昇に伴って学生数が増加したことが挙げられる。戦後から 1950 年代後半において、大学生は同世代の 1 割以下の「エリート層」であったが、「1963(昭和 38)年度には大学短大の進学は 15%を超えてマス段階に入」と、教室に収容しきれないほど受講生、一人の教員によるマスプロ講義、戦前の慣例から休講を当然とする教員、出席を取らず自主休講を奨励する教員などがおり、大学教育に不満を持つ学生も多かった。しかし、こうしたマスプロ「授業でみたされぬなにか」を満たしたいという学生の欲求や、(自主)休講によって生まれた自由な時間も、高度成長期にサークル活動が拡大した要因だったと思われる(橋本 2010:80-95)。

また、大学スポーツサークルが拡大した高度成長期は、学生の経済状況が大きく改善された時期でもあった。図 3 は、早大が同校の学生を対象にして、2 年おきに行う「学生生活実態調査報告

書」をもとに、1969 年から 89 年における学生の支出やそれに占める娯楽費の金額・割合の推移を示したものである。1957 年の「学資」の月額平均は、自宅生で約 6,300 円、下宿生で約 12,000 円で、娯楽・嗜好費は約 1,000 円であった(早稲田大学 1957:40–61)。それが 1969 年に

なると、1 か月の支出は約 2 万円、娯楽費は約 2,600 円へと倍増した。さらに、1989 年までの 20 年で生活費は約 5 倍に増加した。娯楽費の割合は、20~25%を安定的に推移していることから、経済成長を背景にした学生の生活費の増加に伴い、娯楽費も増加していったことがわかる。

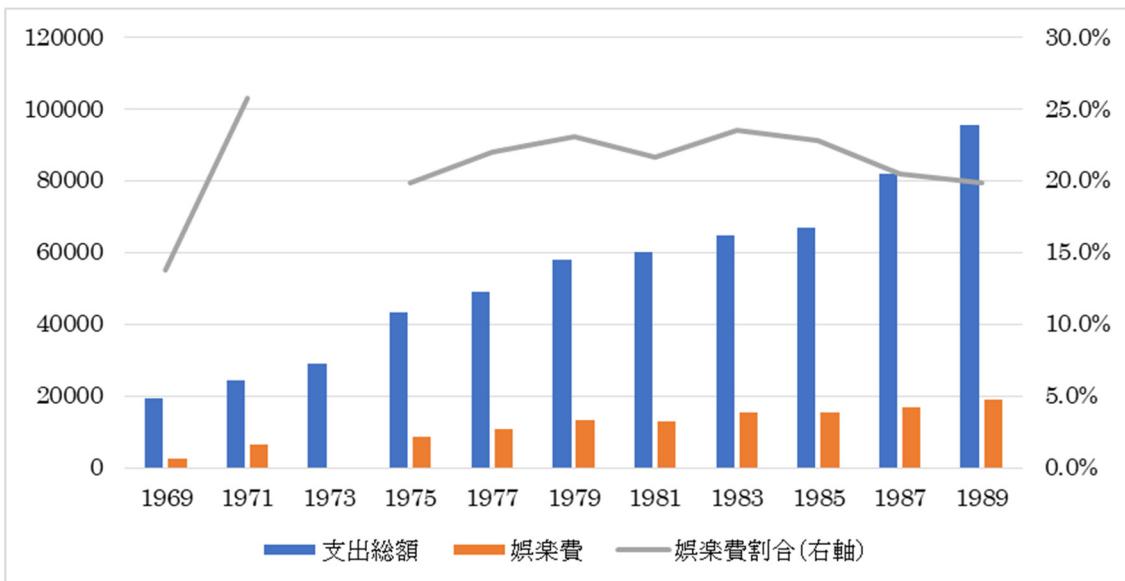


図 3 早大生の 1 か月の支出総額と娯楽費の推移 (出典)早稲田大学(1969–1985)より筆者作成。  
1969 年・71 年の「支出総額」は、学部別に算出された平均金額の単純平均で算出した。1987 年・89 年の「娯楽費」は、「娯楽費」と「課外活動費」の合計

終戦直後の時期には、「ほとんどの学生は、学費はいうにおよばず、何より生きていくのに最低限必要な生活費を稼ぐために、必死の状況におかれ」ていたが、高度成長期になると「学生のあいだでも、カメラ、トランジスタラジオ、自転車、ギターなどといった耐久消費財ブームが」起こり、「生活費支出からみる限り、『遊び文化』は、この時期から急激に膨らんでいくことになったのであり(岩田 2005:92–94)、スポーツサークルも経済成長を背景にした「遊び文化」<sup>12</sup>の一つとして、急激に拡大・定着することとなったのである。

さらに、高度成長期にスポーツサークルが拡大した背景として見逃せないのが、スポーツ施設数の増加である。高度成長期の日本社会の都市化・工業化による日常生活における身体活動の減少や、公害や自然環境破壊に伴う健康問題への関心の高まりを背景にして、日本でもスポ

ツフォーオールを目指すスポーツ政策が展開した。特に、1972 年に保健体育審議会から出された答申「体育・スポーツの普及振興に関する基本方策について」では、「選手中心の競技スポーツ」にかわって「日常の体育・スポーツ活動を活発にする」ことや「多くの学生が各自の体力の程度等に応じて、体育・スポーツ活動を進んで行なうこと」を助長することなど、競技スポーツに偏重したスポーツ振興政策の転換、人口当たりのスポーツ施設整備基準の提示、市民の自発的なスポーツ活動の促進などが打ち出された(文部省 1972, 尾崎 2012, 内海 2013)。

その結果、日本国内におけるスポーツ施設数は急増した。文部科学省の調査によると、1969 年に 14.8 万箇所だった体育・スポーツ施設が、16 年後の 1985 年には 29.2 万箇所へとほぼ倍増した。特に、職場スポーツ施設、公共スポーツ施設、

民間営利／非営利スポーツ施設という学校以外のスポーツ施設数が、1969 年の約 4 万箇所から 1985 年の 13.4 万箇所と 3 倍以上も増加した(文部科学省 1969, 1985)。

前章までで見てきたように、WTC や稲穂は早大の学外の施設を利用して活動を行っていたが、こうしたことが可能になったのは、1960 年代から 80 年代にかけてスポーツ施設、特に学校外のスポーツ施設の整備が進んだことにより、学内施設

で活動することが難しいスポーツサークルであっても学外の施設を利用しやすい環境が生まれたことが影響していると思われる。

## 2.大学運動部への影響

高度成長期にスポーツサークルが誕生・拡大し、多くの学生にとって身近なスポーツ活動として定着したことで、大学運動部にも様々な影響が見られるようになった。

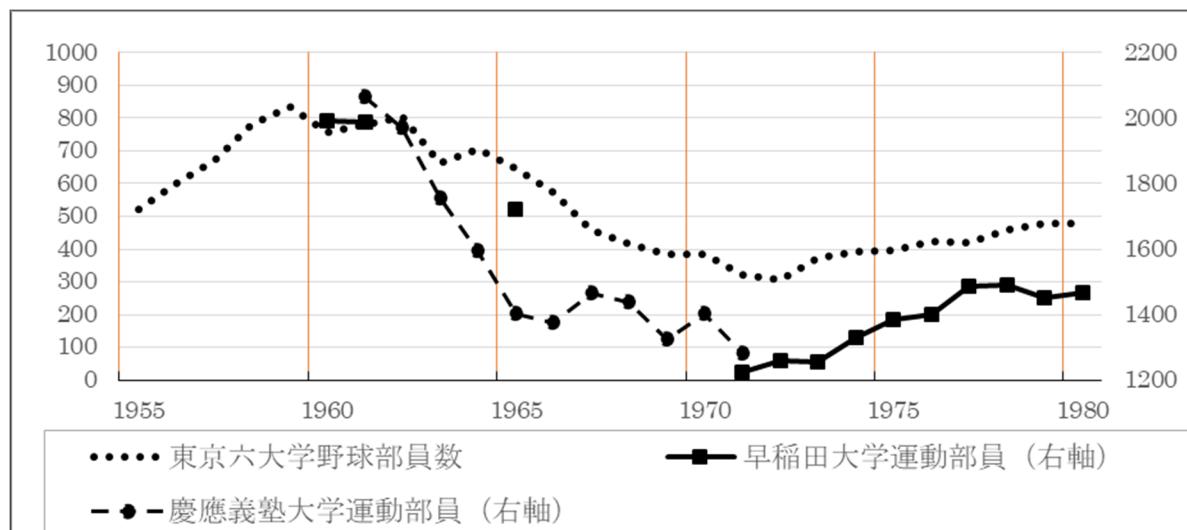


図 4 東京六大学野球・早大運動部・慶大運動部部員数

出典: 東京六大学野球部員数は、東京六大学野球連盟(1955–1980)，早大運動部員数は早稲田大学競技スポーツセンター提供資料，慶大運動部員数は笹島(1972)，より筆者作成。

図 4 は、東京六大学野球、早大運動部、慶大運動部の部員数の推移をグラフにしたものである。東京六大学野球部の部員数は、1959 年の 835 人をピークに以後減少し、1972 年には 306 人と 60% 以上も減少した。1960 年に 1,992 人いた早大運動部員は 1971 年に 1,225 人に、1961 年に 2,065 人いた慶大運動部員は 1971 年に 1,281 人へといずれも 40% 近く減少していることがわかる。データの不明部分はあるものの、1960 年前後の時期からわずか 10 年ほどの期間で、運動部員数が大幅に減少したことがわかる。

部員数の減少は、運動部の活動に大きな影響を与えることとなった。例えば、「往年 100 名をゆうに越す大部隊を擁した名門、早稲田競走部」は、1970 年には部員数が 40 名を下回り、「ブロック練習になると長距離と投てきは、広いグラウンドにパラパラという状態」となった。なかでも「長距離ブロックは、一般学生を含め 10 名前後」しか部員がおらず、しかも「5000m を 16 分を切る選手は 1 ~ 2 名で、他の者は 16 ~ 18 分台の選手」で、「大学に入学して本格的に始めた選手や、高校時は他の選手で駅伝のために入部した素人の集団で、トラックからロードに練習が移行する時などは、スキーパーの距離の選手と一緒に走っても勝てる選手は半分もおらず、真剣にスキーパーの選手を登録しようかと話し合った」という。第 1 回から連続出場を続けていた箱根駅伝では「選手も試合当日は大変で、付添いも足らず自分のレースが終ったら残って、翌日は復路の選手の付添いをし、区間によっては、他ブロックの選手の手を借りて

まかなかった」という。1970 年の第 46 回箱根駅伝には、「メンバー不足のため不出場」という苦難も味わった(早稲田アスレチッククラブ編 1984:260)。

水泳部は、「十分な選手数が揃わない」ながらも、インカレに出場した選手の「ほぼ全員が入賞し、必ず得点を稼いでくる」「少数精銳」のチームとなった。しかし、ライバルである日本大学水泳部は「人数面での優位に加え、例年インターハイ優勝者がごっそり入学するといった状況」であったため、「優勝種目数では日大を上回りながら、得点では頭数の違いで負けてしまうといった、非常に悔しい思いを味わい続けた」(稻泳会 1991:152)。

早大バスケットボール部は、1970 年の「合宿終了後」に 1 年生部員は「ただ一人」となり、「一人で 6 個のボールを運び、ボール磨き、コート掃除など新人のノルマを一人でやる毎日」を送ることになった(早稲田大学 RDR 俱楽部編 1983:120)。

運動部員数の減少は、入試における「運動選手の優遇措置」の廃止、夜間部にあたる第二学部の募集停止(1965 年法学部・商学部, 1966 年政治経済学部)といった早大の制度的要因に加えて、第二学生会館の管理・運営や学費の値上げをめぐって、1966 年 1 月から約半年にわたって行われた全学的なストライキ(早大闘争)に際して、運動部員が「殴り込み」や「スト破り」を行ったことで<sup>13</sup>、学生運動から「破廉恥極まりない行為」と強く批判されただけでなく(早稲田大学新聞会 1966)<sup>14</sup>、一般学生の間でも「運動部に対する印象が悪化して、入部が一層敬遠」されるようになったことも影響したと思われる。早大としても、1964 年に教育学部に教育学科体育学専修を増設したり、1966 年に夜間部の社会科学部を開設したりしていたが(早稲田大学大学史編集所編 1997:796)、運動部員数は 1970 年代前半まで減少を続けた。

こうした現象は、早大以外の大学運動部でも起こっていた。例えば、立教大学野球部は、1970 年代半ばに「入学難からくる入部者の極端な減少により」「野球部存亡の危機」ともいえる状況に直面し、「部内の紅白戦はおろか、十分な打撃練習、守備練習さえ覚束なくな」った。「部長が対外的な役割を、私〔監督〕がもっぱら合宿生活で

のカウンセラー的役割を担」つたり、「新入部員獲得」のために「積極的な勧誘、および長期的展望のうえに立った、文武両道をうたう高校への働きかけ」などを行った(立教大学野球部編纂委員会編 1981:538)。

明治大学ボクシング部では、部員不足のために思うような練習が出来ず、「恥も外聞もかなぐり捨て、ただ部を救いたい一心で、同好会との合同練習」を行ったり、法大体育会ではソフトボールや野球、バドミントンの学内大会を催し、商品にビールやジュースを用意」したりすることもあった(朝日新聞 1981)<sup>15</sup>。

スポーツサークルの団体数や会員数が増加の一途をたどる一方で、戦前から日本の競技スポーツの拠点となっていた大学運動部は、部員数の不足によって競技力が低下したり、練習や試合で思うような活動ができなくなったりするといった影響も受けたのである。そして、こうした大学運動部の問題を克服するための施策として、1970 年代以降にスポーツ推薦入試が導入され、拡大していくこととなったのである(神谷 2015, および、小野ら 2017)。

## VI. おわりに

これまでに見てきたように、日本の大学スポーツが運動部とサークルの二重構造になった背景には、1920 年代以降の大学運動部の高度化と、それに伴う練習・選手間競争の激化、厳格な上下関係等によって、多くの選手が淘汰される環境が成立したことが挙げられる。早大をはじめとした私大が、トップアスリート養成の拠点として成立する一方で、大半の学生は、そこまでの高い競技レベルには届かなかったり、目指すことをあきらめたりせざるをえなかった。それでもスポーツをしたい、スポーツを楽しみたいと考えた学生たちが、自主的に仲間を募って組織を作り、活動場所を探し、活動方針や大会・試合の方法などを工夫しながら作り上げたのが、スポーツサークルであった。

こうした歴史的経緯から、成立当初のスポーツサークルは、「素人歓迎」や「楽しさ」「緩い上下関係」といった運動部との違いを強く意識して、

会員を募集したり、活動方針を立てたりしていた。こうした運動部との差異化を意識した募集や活動の実態から、運動部とスポーツサークルは、同じ「スポーツをする集団」でありながらも、対照的なイメージや組織形態が定着していったものと思われる。

運動部とサークルの乖離は、1964 年オリンピック東京大会への反応にも見られるように思われる。上述したように、同大会には早大から 23 名の学生が出場し、記念会堂がフェンシング会場となつたが、そのことがスポーツサークルの誕生・拡大に影響したという証言や資料は、管見の限り見つけることはできなかった。1964 年東京大会が地域スポーツに与えた影響について、尾崎は「オリンピックと地域スポーツとは全く別物として動いて」おり、「六四年大会は人々のスポーツ参加の増大や公共スポーツ施設整備と直接結びつかなかつた」と指摘しているが、それは、スポーツサークルについても同様だったものと思われる(尾崎 2018: 137)。

しかし一方で、本稿で見てきたように、スポーツサークルの競技志向については、団体や会員ごとにかなりの差異があることも確かである。同好会リーグ・大会での優勝を目指して熱心に活動したり、指導書を読み込んだりして日常的にトレーニングや自主練習を行う会員がいる団体もあれば、日常的な練習量が不足しているために競技レベルを落としたり、試合に出場せずに帰宅したりする会員もいた。そうした会員の競技志向の差異を許容するかどうかは、個人競技／団体競技や、団体の方針によって異なるものと思われる。

また、1970 年代後半以降にスポーツサークルの団体数が増加し、同一競技で複数の団体が存在するようになると、スポーツサークル同士の差異化を図るために、「ちゃんとやらしていない」ことや「ミーハー禁止」等の方針を打ち出すサークルも現れた。一口に「スポーツサークル」といっても、詳細に検討すると、競技志向や勝利を追求する姿勢には、団体や個人、時期によって差異や変化がある。スポーツサークルは、運動部のように競技レベルの向上や試合での勝利だけを追求しているわけではないが、競技レベルの向上や試

合での勝利を追求していないわけでもないのである。

スポーツサークルのこうした実態を見ると、中村が述べたように「努力の量や質」「人格形成」の面からスポーツサークルを評価する視点の問題点が明らかとなろう。本稿で見てきたように、スポーツサークルに参加してきた人々は、自らの競技レベルや学業への意欲、運動部の活動に対する疑問等の様々な理由から、スポーツサークルに参加してきた。特に、サークルを立ち上げた人々は、大学からの支援や活動場所もないなかで、仲間を集めて団体を組織し、会員の募集や活動方針の決定、活動可能な施設探しなどに悪戦苦闘しながら、サークルの活動を安定させるために懸命の努力を続けてきた。その結果、運動部に所属していない多くの大学生が、各自の好むスポーツを、自分の競技レベルや志向に合わせて、日常的に楽しむ環境が作られ、大学におけるスポーツの大衆化が実現されることになったのである。

中村は、1970 年代の高校生の部活動(クラブ活動)を題材にした著書において、「強く束縛されたり、厳しく鍛えられたりするのではなく、できることなら自分がやりたいと思ったときに、自由に楽しくできるようなクラブ」(中村 1979:19)に理解を示し、「きわめて多様であるはずの興味や趣味の条件の整備」の重要性を主張している(中村 1979:43)。本稿で見たように大学におけるスポーツサークルは、各自の技術レベルや競技志向に基づいて、自由に楽しくスポーツを行ってきたのであり、それを可能にした条件が、同一競技であっても数多くの団体が存在する、というスポーツサークルの多様性であった。中村のスポーツサークル論に欠けていたのは、スポーツサークルで行われていた実践について、運動部の視点から批判するのではなく、その活動に寄り添いながら、丹念に見ていく視点だったように思われる。

また、本稿で見てきたとおり、日本の大学スポーツにおいても、高度成長期以後に「日本のスポーツ」とは異なるあり方のスポーツ活動が展開してきたことは明らかである。「日本のスポーツ」は、トップアスリート養成の拠点となった大学運動部に見られる慣習であり、参加人数も学生数全体の

わずか数%に過ぎないものであった。少なくとも、1970 年代以降、大多数の学生はスポーツサークルに参加するようになっており、その規模は運動部員の数倍にも上るものであった。

このような歴史的事実を見ると、むしろ問われるべきは、参加者の面では少数派であった運動部を「主流」「正統」とみなし、日本を代表させて論じてきた研究者の無意識の前提であろう。また、いつ、どこで、精神主義や勝利至上主義、娛樂性の欠如といった問題が発生したのかを具体的に解明することにより、それが発生した歴史的経緯や社会構造の解明も可能になるであろう。

さらに、「日本のスポーツ」は、参加者個人の自由や権利を軽視し、組織の自治や自律性に欠ける集団ととらえられてきた。しかし、スポーツサークルの組織や活動の実態をつぶさに見ていくと、日本においても個人の自由や平等性を担保しつつ、構成員の自治によって多様でダイナミックな活動が展開してきたことは明らかである。スポーツサークルにおいてこそ、対外試合の勝利や競技力の向上を絶対視せず、個人の競技力や競技志向、日常生活とスポーツを両立することで、「日本のスポーツ」とは異なるスポーツ実践が積み重ねられてきたのである。

こうした知見は、生徒も教師も追いつめられる「ブラック部活動」(内田 2017)として批判されてきた中学・高校の運動部のあり方を、生徒を主体として自治によって改善しようとする研究動向(神谷 2016, および神谷監 2020 等)や、「ゆる部活」として行われている部活動改革の実践<sup>16</sup>(朝日新聞 2020)などにも資するものと思われる。部活動改革が叫ばれ、現状の改善に向けた様々な提案がなされているが、大学スポーツサークルにはその改善に資する多くのヒントがあるように思われる。

## [参考文献]

- ・芥田武夫(1981)わが熱球 60 年史, 恒文社
- ・天野正子(2005)「つきあい」の戦後史 サークル・ネットワークの拓く地平, 吉川弘文館
- ・朝日新聞社(1974, 1981, 2020), 朝日新聞, 朝日新聞社
- ・土橋信男(1969)現代学生の諸侧面, リーディ

- ングス日本の高等教育 3 大学生 キャンパスの生態史, 橋本鉱市編, 玉川大学出版部
- ・神谷拓(2015)運動部活動の教育学入門—歴史とのダイアローグ, 大修館書店
- ・神谷拓(2016)生徒が自分たちで強くなる部活動指導, 明治図書出版
- ・神谷拓監修(2020)部活動学 子どもたちが主体のよりよいクラブをつくる 24 の視点, ベースボール・マガジン社
- ・河西秀哉(2016)うたごえの戦後史, 人文書院
- ・高津勝(1994)日本近代スポーツ史の底流, 創文企画
- ・日下裕弘(1996)日本スポーツ文化の源流 成立期におけるわが国のスポーツ制度に関する研究—その形態および特性を中心に—, 不昧堂出版
- ・橋本鉱市(2010)キャンパスライフとカレッジ・インパクト, リーディングス日本の高等教育 3 大学生 キャンパスの生態史, 橋本鉱市編, 玉川大学出版部
- ・畠山嘉一(発行年不明), 私にとっての早稲田大学柔道会
- ・兵藤昌彦(1979)大学におけるスポーツ同好会の現状と課題, 体育の科学, 29(5), 杏林書院
- ・井之上正信, 古賀正躬, 藤井主税(1972)大学におけるスポーツ同好会に関する研究, 天理大学学報体育編, 12, 天理大学学術研究会
- ・岩田弘三(2003a)サークル文化のあゆみ, キャンパスライフの今, 武内清編, 玉川大学出版部
- ・岩田弘三(2003b)勉強文化と遊び文化の盛衰, キャンパスライフの今, 武内清編, 玉川大学出版部
- ・岩田弘三(2005)キャンパスライフの社会史, 大学とキャンパスライフ, 武内清編, 上智大学出版
- ・毎日新聞社(1970), 毎日新聞, 毎日新聞社.
- ・マイルストーン編集会編(1982–1985), マイルストーンエクスプレス, マイルストーン編集会
- ・松尾哲矢(2006)乱立するスポーツ系サークルの今, 現代スポーツ評論, 14, 創文企画
- ・道場親信(2016)下丸子文化集団とその時代 1950 年代サークル文化運動の光芒, みすず書

## 房

- ・文部省(1969, 1985), 体育・スポーツ施設現況調査, <https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&toukei=00402101&tstat=000001088795>, 2022 年 2 月 17 日閲覧
- ・文部省(1972), 体育・スポーツの普及振興に関する基本方策について <保健体育審議会答申>, [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/old\\_chukyo/old\\_hoken\\_index/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2011/12/27/1314680\\_001.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_hoken_index/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/12/27/1314680_001.pdf), 2020 年 6 月 15 日閲覧
- ・中村哲也(2019)体罰・しごき・上下関係－日本のスポーツチームにおける体罰発生の要因と背景, 現代スポーツ評論, 40 号, 創文企画
- ・中村敏雄(1979)クラブ活動入門, 高文研
- ・中村敏雄(1991)スポーツルールの社会学, 朝日新聞社
- ・中澤篤史(2010)オリンピック日本選手団における学生選手に関する検討資料－1912 年ストックホルム大会から 1996 年アトランタ大会までを対象に－, 一橋大学スポーツ研究, 29, 一橋大学スポーツ科学研究所
- ・「二部スポーツサークル二十年の歩み」編集委員会編(1986)二部スポーツサークル二十年の歩み, 「二部スポーツサークル二十年の歩み」編集委員会
- ・織田幹雄(1997)織田幹雄 わが陸上人生, 日本図書センター
- ・小川邦和(1992)日・米・韓・メキシコ・カナダ ベースボール放浪記, 芸文社
- ・岡部祐介(2021)スポーツ根性論の誕生と変容－卓越への意志・勝利の追求, 旬報社
- ・岡三郎(1968)大学におけるスポーツ同好会の現状とその問題点, 体育の科学, 18 卷 3 号, 杏林書院
- ・小野瀬剛志(2002)昭和初期におけるスポーツ論争 「日本のスポーツ観」をめぐって, スポーツ社会学研究, 15, 日本スポーツ社会学会
- ・小野雄大・友添秀則・根本想(2017)わが国における大学のスポーツ推薦入学試験制度の形成過程に関する研究, 体育学研究, 62(2), 日

## 本体育学会

- ・大沢真一郎(1976)サークルの戦後史, 共同研究集団 サークルの戦後思想史, 思想の科学研究会編, 平凡社
- ・尾崎正峰(2012)地域スポーツを支える条件の戦後史－指導者, とくに職員問題に着目して－, スポーツ社会学研究, 20(2), 日本スポーツ社会学会
- ・尾崎正峰(2018)背中合わせのオリンピックと地域スポーツ, 一九六四年東京オリンピックは何を生んだのか, 石坂友司編, 青弓社
- ・立教大学野球部編纂委員会編(1981), 立教大学野球部史, セントポールズ・ベースボールクラブ
- ・坂上康博(2001)にっぽん野球の系譜学, 青弓社
- ・笛島恒輔(1972)運動部員の減少と同好会員の増加, 学校体育, 25(11), 体育日本社
- ・関根弘和(2015)インタビュー調査資料(2015.8.24)
- ・思想の科学研究会編(1976)共同研究集団 サークルの戦後思想史, 平凡社
- ・早大バレーボール同好会創立 50 周年記念誌編集委員会編(2014)早稲田大学バレーボール同好会創立 50 周年記念誌
- ・武内清編(2003)キャンパスライフの今, 玉川大学出版部
- ・武内清編(2005)大学とキャンパスライフ, 上智大学出版
- ・東原文郎(2013)1912～2008 年夏季オリンピック日本代表選手団に関する資料: 所属組織と最終学歴を中心に, スポーツ科学研究, 10, 早稲田大学スポーツ科学学院
- ・飛田穂洲(1960)飛田穂洲選集 第 3 卷, ベースボール・マガジン社
- ・稻泳会(1991)早稲田大学水泳部八十年史, 稲泳会
- ・東京六大学野球連盟(1955-1980), 野球年鑑, 東京六大学野球連盟
- ・稻門テニス倶楽部・早稲田大学庭球部編(1974)早稲田大学庭球部七十周年誌, 早稲田大学出版部

- ・稻門バレーボール倶楽部 50 年史編纂委員会 (1981) 集り散じて 50 年の歩み, 稲門バレーボール倶楽部 50 年史編纂委員会
- ・鶴見俊輔(1976)なぜサークルを研究するか, 共同研究集団 サークルの戦後思想史, 思想の科学研究会編, 平凡社
- ・内田良(2017)ブラック部活動, 東洋館
- ・内海和雄(2013)戦後日本の福祉とスポーツ, 広島経済大学研究論集, 36(1), 広島経済大学経済学会
- ・早稲田アスレチッククラブ編(1984)早稲田大学競走部七十年史, 早稲田アスレチッククラブ
- ・早稲田大学(1957–1985), 学生生活実態調査報告書, 早稲田大学
- ・早稲田大学大学史編集所編(1997)早稲田大学百年史 第五巻, 早稲田大学
- ・早稲田大学学生生活課, 課外活動における基本ルール,  
<https://www.waseda.jp/inst/student/circle/type>, 2022 年 3 月 1 日閲覧
- ・早稲田大学学生部(1960–1967), 学園生活, 早稲田大学
- ・早稲田大学稲穂キッカーズ(1987)稲穂四半世紀(付 OB・現役名簿)
- ・早稲田大学稲穂キッカーズ(1992)早稲田大学稲穂キッカーズ創立 30 周年記念 勝利の美酒と死闘の歩み～集り散じて人は変われど～
- ・早稲田大学 RDR 倶楽部編(1983)RDR60, 早稲田大学 RDR 倶楽部
- ・早稲田大学新聞会(1966)早稲田大学新聞, マイクロフィルム
- ・早稲田大学新聞会(1982), 早稲田大学新聞, 復刻版, 龍溪書舎
- ・早稲田大学総長室広報課編(1968–1982), 学生の手帖, 早稲田大学総長室広報課
- ・早稲田スポーツ新聞会(1960–1961), 早稲田大学スポーツ年鑑, 早稲田スポーツ新聞会
- ・早稲田スポーツ新聞会(1990), 早稲田スポーツ, 縮刷版, 早稲田大学新聞会
- ・WMW50 年史編集委員会編(1977)早稲田大学ア式蹴球部 50 年史, 早稲田大学 WMW クラブ
- ・八島健司(1968)大学課外体育における同好会に関する考察 その 1 本学における実態, 体育研究, 2, 中央大学保健体育教科運営委員会
- ・八島健司(1969)大学課外体育における同好会に関する考察-2-運動部と同好会に関する問題, 体育研究, 3, 中央大学保健体育教科運営委員会
- ・筆者不明(1970), 昭和 45 年度第 1 回関東大学テニス同好会春季大会

## [付記]

本稿は、早稲田大学 2014 年度特定課題研究助成費（特定課題 B）（課題番号 2014B-431）「戦後日本の大学スポーツの変容一部活とサークルの実態調査一」, および, 平成 27–29 年度日本学術振興機構科学研究費助成事業若手研究(B)（課題番号 15K16468）「戦後日本の大学スポーツの実証的研究一部活・サークル二重構造の形成と展開一」の成果の一部である。

また, 本研究の遂行に際しては, 早稲田大学スポーツ科学学術院石井昌幸教授, 広瀬統一教授, 石井香織教授, 早大テニスクラブ OB 会江島弘志氏, 小松俊之氏, 稲穂キッカーズ OB 後藤謙太氏, 早大バレーボール同好会 OB 舛田和明氏, 柔道会 OB 大島直氏をはじめ, 多くの方々にご尽力をいただいた.

本稿の執筆が遅れましたこと, すべての方のインタビュー内容を活用できなかったことをお詫び申し上げますとともに, 皆様のご協力に改めて感謝を申し上げます.

- <sup>1</sup> 早稲田大学競技スポーツセンターの提供資料による。
- <sup>2</sup> この点については中村自身も「このような問い合わせを発すること自体が『オールドスポーツ』の人格形成論にとらわれすぎているとも、また『ニュースポーツ』に対する無知を暴露するものともいわれかねないし、さらにはスポーツによる人格形成ということを高く評価しそうでおり、所詮、スポーツは昔も今も『気晴らし』の手段以上のものではないといわれかねない」と自覚的に述べている(中村 1991:179)。
- <sup>3</sup> 現在、早大の公認サークルは、学生の会・学生稻門会・同好会・学生 NPO などに所属するサークル・学術院承認サークルの 5 種類と定義されており、大学への届け出しているものの公認のための要件を満たしていないサークルを「登録サークル」、大学への届け出していないサークルを「無届団体」としており、「無届団体は、原則、教室や新歓ブースを利用することができ」ない(早稲田大学学生生活課)。
- <sup>4</sup> 史資料の引用に際して、必要に応じて〔 〕内に筆者の補足を追加した。以下同じ。
- <sup>5</sup> 1920 年代から戦後における大学運動部の変化は、早大のみの現象ではなく、スポーツの強豪として知られる大学運動部に共通するものと思われる。拙稿「体罰・しごき・上下関係—日本のスポーツチームにおける体罰発生の要因と背景」、『現代スポーツ評論』40 号、2019 年、創文企画、参照。
- <sup>6</sup> なお同誌には「走家庭球術」というサークルの創立年数が「四千年」と記載されているが、サークル代表者名が「大豪院日川」、集合場所が「男塾」であることから、本記事の内容は、同時期に連載されていた人気漫画を元ネタにしたパロディであり、事実を示しているものではない、と判断した。
- <sup>7</sup> 畠山の引用文中のスペースは原文ママ。以下同じ。
- <sup>8</sup> 史料には記載されていないが、非公認サークルとして活動している団体も存在していた。例えば、III-4 でも見られるように、理工柔道部は、1960 年代に柔道会に先行して活動を行っていた。しかし、『マイリストーンエクスプレス』が創刊される 1982 年以前において、非公認サークルも含めたサークル活動の全体像を把握することは、史料的な制約から困難である。
- <sup>9</sup> 高橋が読んだ記事は、「明日に向かってスポーツを考える 4 揺れる大学スポーツ」、『朝日新聞』1974 年 1 月 19 日付朝刊。
- <sup>10</sup>『早稲田スポーツ』1983 年 7 月 1 日。
- <sup>11</sup>『毎日新聞』1970 年 11 月 25 日付朝刊。
- <sup>12</sup>これまでみてきたように、スポーツサークルや参加者の中には、試合での勝利や自身の競技レベルの向上を目指してきたものもいることは確かである。しかし一方で、サークル参加者は、運動部員のようにプロやトップアスリートになることを目指しているわけではないことも明らかのことから、サークル参加者のスポーツ活動は広義の「遊び文化」に位置づけられるように思われる。
- <sup>13</sup>『早稲田大学新聞』1966 年 2 月 17 日。
- <sup>14</sup>『早稲田大学新聞』1966 年 4 月 21 日。
- <sup>15</sup>『朝日新聞』1981 年 3 月 6 日付朝刊。
- <sup>16</sup>『朝日新聞』2020 年 2 月 21 日付朝刊。